
IS - インフィニット・ストラatos - 希望と絶望の力

岩田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS・インフィニット・ストラトス -希望と絶望の力

【Zコード】

N7277Y

【作者名】

岩田

【あらすじ】

“女性にしか反応しない”、世界最強の兵器「インフィニット・ストラトス」、通称「IS」（アイエス）の出現後、男女の社会的パワーバランスが一変し、女尊男卑が当たり前になってしまった時代。そんな中ISを動かした男子がいた・・・。しかしその内一人は普通の男子・・・なのか？なにやら女の子のように見えるが・・・。アドバイス、意見、感想など募集します。

Story1 自分ともう一人以外は全員女子

インフィニット・ストラトス・・・通称IS・・・。

篠ノ之博士が開発したパワードスーツで、現代兵器を大きく上回った性能を持ち、最強の起動兵器ともいえる・・・。しかしISはなぜか女性にしか反応せず、今の世の中は女性が優位な社会で、今まで優位だった男性は格下になつた・・・。しかし、女性にしか反応しないISだが・・・例外はある・・・。

そう・・・世界でISを扱える男子が・・・一人も現れたのだ・・・

「・・・・・・・・・・・・・

「」は日本にある『IS学園』・・・

今日は入学式と重なつわけで賑やかであった・・・

その正面門に僕はいた・・・

背丈は普通なくらいで、首のうなじまで伸ばした髪の色はオレンジで、途中の辺りから紐で結んで束ねていた。瞳の色はサファイアのようになく、その顔つきもかわいらしい女の子・・・のようであつた。着ているのはEIS学園の制服で、元々女子しか通わないと言つことで特注の男子の制服である。

「・・・なんて言ひか・・・どひじてこいつなつたんだりうね・・・」

と呟いて、男子・・・近衛スバルはEIS学園へと入つていく・・・。

そもそもその発端は一ヶ月前のことであった・・・

「うう・・・寒い・・・」

一段と寒かつたその日にスバルは高校の試験会場に向かつており、試験会場の近くの駅に着いた。

「いよいよか・・・全力で行こう」

と、駅から出て、スバルは試験会場に向かう・・・

「・・・ええと・・・どーかな・・?」

スバルはメモを確認しながら建物に入ったのも、どこなのか分からず、人気があんまりない廊下にいた。

「・・・おかしいな」

そして建物内を進んでいくと・・・

「どつしたの?」

と、曲がり角から声がした。

スバルは振り向くと、そこにはなにやら怪しげな人物があり、黒いコートを着て、フードを深々と被つて顔が見えなかつた。

「ええと・・・試験会場にはどつやつて行けばいいんでしょうか? どつもメモが違うみたいで」

「そつか・・・だつたらこの先を進んでいいで、二つ目の曲がり角を右に行けばいいよ」

「わつですか・・・ありがとうございます」

と、スバルはお礼を言つて怪しげな人物が言つたほうへと歩いていく。

「・・・フフフ・・・・作戦成功・・・」

と、その人物はフードを取つて、中に入れていたピンクの髪を出した。

「私の期待通りになつてね・・・スバル君」

と、その人物・・・・・篠ノ之束は姿が見えなくなつたスバルにウインクした。

「さてと・・・私はこれで・・・」

束は再びフードを被つて、その場を去つた・・・

「・・・じこで・・・いいんだよね?」

スバルは言われたとおりに進んでいつて、ドアの前に立つていた。

「でも人気がないような・・・まあ入つてみれば分かるかな」

と、スバルはドアを開けて中に入る。

「・・・誰もいない・・・」

中に入ったのも、誰もおらず、少し薄暗かつた。

「・・・間違いか・・・・・ん?」

と、出でたとしたとき、田の端に何かが映つた。

「あれって・・・」

スバルは向き直つてそれを見た。

「・・・IS?」

部屋の奥には一体のISが置かれていた。

「・・・ISか。確かに女性にしか反応しない兵器・・・まあ僕は外見女子の子のように見える・・・って言つても・・・関係ないか・・・」

スバルはISに近付いて辺りを見た。

「なんだか・・・凄いなあ」

と、スバルがISに触れた瞬間・・・

「!?

ISに触れた瞬間、スバルの頭の中に膨大なデータが流れ、手元ではISから光が出ていた・・・しかもかなり強い光であった。

「・・・まさか・・動くの?」

と、思ついたら・・・

「君！勝手に入つたらだめ……って、これは……？」

すると関係者が三人入つて来たものも、スバルの手から放たれる光に驚いていた。

「ISが大きく反応している？ばかな……」Jまで反応する『女子』はいなかつたぞ」

（・・僕・・男の子なんだけど・・）

外見が可愛い女子に見えるので初見の人は必ず間違える。

「・・・しかも試験リストにはいません。どういうことでしょうか

「分からぬ・・・君・・ちょっとといいかな」

と、スバルは関係者に色々と事情を聞かれた・・・

その後IS適性の検査を行われて、IS適正の中では一番高い『S』を出して、驚かれた。更に男だと言うことが分かつて更に驚かれた・（そりや驚くか・・）。話によれば僕はIS使える男子二人目らしい・・。そして強制的にIS学園への入学手続きが行われた・・

そもそもって今に至る・・・

「初めまして・・・私がこのクラスの副担任をします『山田真耶』と申します」

と、教室で副担任の自己紹介が始まった・・・

クラスは一組で、スバルは左から3列目の一一番前の席に座っていた。

（・・・この人が・・・世界で初めてＩＳを動かした・・・織斑一夏君か・・・）

スバルの隣には織斑一夏が座っていた。しかし女子からの視線が気になつてているのかなんとなく落ち着きがない。

（まあ僕も同じなんだけどね・・・）

スバルも女子からの視線に気になつていた。

「・・・くん・・・織斑君つ」

「は、はい！」

すると山田先生に呼ばれて、一夏は少し裏返った声で答えた。

それによつて女子生徒からくすぐすと静かな笑いが聞こえた。

「あつ。『ごめんね・・大声出しちゃつて。でも自己紹介があつて、『あ』から始まつて今『お』なんだよね・・』

「そ、そりですか・・・」

と、一夏は席を立つた。

「お、織斑一夏です・・・。よろしくお願ひします」

と言つと、女子生徒の目が光つた。

（うわあ・・・物凄い期待の目・・・）

スバルはそう感じて、一夏のほつを見る。

「・・・」

一夏はしばらくして、深呼吸して・・・

「・・・以上です！」

ドカアアアツ・・・!!

と、女子人一同倒れた。

「え？・・・お、俺何か悪いことと言つた？」

すると、黒いスーツを着た教師が入ってきて、一夏の頭を出席簿で叩いた。

「ぐえつー!?」

「全く……。朝から何を言つて思えぱ……」「

と、その教師はため息をついた。

「あつ、織斑先生。会議は終わったのですか？」

「ああ。代わりをしてもうつてしまないな山田先生」

と、織斑先生と呼ばれる教師は山田先生に代わつて教卓に立つ。

「私がこのクラスの担任をする『織斑千冬』だ。私の役目はお前たちひよつこを一人前に仕立て上げることだ」

と言つと……

「きやああああ……本物の千冬様よ……」

「本物だ！私あなたに会つたために九州から来ました！」

と、女子陣から盛大な声が響いた。

「全く……。いつも私のところには厄介なものが入つてくるな……。これだから新学期は好きじやないな」

と言つと……

「さやあああ！千冬様！」

「もつと罵つて……」

と、再び女子陣の声が響く。

（凄い・・・織斑千冬・・・いまだに人気なんだね・・・）

スバルは女子の反応から凄い人だと改めて思った。

「・・・千冬姉がクラスの担任？」

一夏はなぜか理解できていない様子だった。

「・・・で、お前は満足にもあこがれができないのか」

と、織斑先生は左の拳を右手に叩きつけて一夏に向いた。

「い、いや・・・千冬姉・・・」

すると織斑先生は一夏の頭を掴むと机にたたきつけた。

「織斑先生だ」

「は、はい・・・織斑先生・・・」

「え？ 織斑君つて千冬様の弟？」

「もしかしてEISを使えるのもそれが関係しているのかな？」

「いいな。変わって欲しい」

と、女子のひそひそ話しが始まった。

「静かに」

と、織斑先生は手を叩いて生徒を黙らせた。

「今日からお前たちには半年でEVSの基本知識を身につけてもらひやう。
いいな？ 良くなくても返事をしろ」

「はい！」と生徒は一齊に返事をした……

そして休み時間……

教室の外では他の学年の生徒が見に来ていた。

そもそもって、スバルの周りには数人女子生徒がいた。

「ねえねえ……近衛君ってハーフっぽい顔しているよね

「あ、それ私も思ったの」

と、スバルの容姿のことについてきた。

「う、うん……。僕のお父さんがイギリス人で、お母さんが日本人の……。名字はお母さんのほうなんだけね」

「へえ……。でも近衛君って女の子みたいよね」

「ははは……。よく言われるんだよね……。まあ慣れているけどね」

と、スバルは苦笑いした。

「そうなんだ・・・でも私最初女の子かと思った」

「そうそう。私もそう思ったの・・・でも男子の制服を着ているから男子だつて分かったんだけどね」

と、話は盛り上がっていた。

そうして時間は過ぎて夕方の四時半・・・

「はあ・・・。何だか慣れないなあ」

スバルはそう呟きながらも寮の廊下を歩いていた。

ちなみにさつきまで多数の女子生徒がついてきていた・・・。

「ええと・・・」「だよね」

と、スバルは手にしていたメモを見た。

ドアの上には『1543』と書かれたプレートが張られていた。

「さてと」

そしてスバルはドアを開けて部屋に入った。

「へえ・・・結構広いんだね」

スバルは部屋の中を見ていた。

そして部屋の中央辺りに来たとき、後ろのシャワールームのドアが開く音がした。

「あら？誰か入っているの？」

と、女子の声がしてスバルは焦った。

「あつ、この部屋と同室になる人ね。さつきまでシャワー浴びていたの・・・今行くね」

「え！？ちょ、ちょっと」

と、シャワールームから一人の女子が出てきた。

「・・・え？」

「・・・あ」

そして二人の目が合い、しばらく沈黙が続いて・・・

そんでもって女子の顔が見る見る赤くなつて・・・

「あやあああーーー」

と、悲鳴を上げてスバルに一発拳を入れた。

「ぐへつーー?」

それによつてスバルは後ろに飛ばされた・・・

「・・・いてて・・・。いきなり殴るなんてひどいよ」

と、スバルは殴られた頬をさすつていた。

「う、うるさい・・・。あんな場面で入つてきたあなたが悪いんですけど」

と、女子はドライヤーで髪を乾かしていた。

銀色の髪をして、瞳の色は水色をしていた。更にこの年には少し似合わないくらい胸が大きい。

「いや・・・。シャワーを浴び終えた後だから音に気付かなかつたんだよ・・。分かるわけないよ」

「・・・ま、まあ言えているわね」

そして女子はスバルのほうに向き直る。

「・・・あなた・・・近衛スバルでしょ?」

「え? 知つているの?」

「知つているつて・・・。同じクラスでしょ」

「あつ・・・。そういうえば・・・」

スバルは教室でこの女子を見かけたことを思い出した。

「それで、君の名前はなんていつの?」

「・・・ゼオラ・・・。ゼオラ・シユバイツアーよ」

「ゼオラか・・・。まあルームメイトとしてよろしくね、シユバイ
ツアーサン」

「ゼオラでいいわよ・・・。呼びにくいでしょ」

「や、そりなんだ・・・。じゃあ改めてよろしく・・・ゼオラ」

「ええ。まあわざ殴つて「ゴメンね・・・。でももうあんなことば
しよ」

「う、うん・・・。なるべく氣をつかぬよ」

やつして二人は握手を交わした。

そして次の日・・・

「おはよウ・・・ゼオラ」

「う、うん・・・おはよウ」

寮の食堂でスバルとゼオラはあいさつした。

「隣いいかしら?」

「うん、いいよ」

スバルは隣の席にゼオラを座らせた。

「・・・・・・」

「・・もしかして・・朝に弱いの?」

「うん・・・。朝つて中々起きれないの・・・

「やうなんだ・・・」

と、スバルはクロワッサンをかじる。

「まあ入つていろいろあるよね。。。僕も色々な人を見てきたから
別に気にしていないよ」

「そ、そ、う、」

と、ゼオラはマーガリンをトーストにつけて食べた。

「じゃあ僕は先に行つているね」

「うん。。。また後でね」

そうしてスバルはゼオラに手を振つて一足先に食堂を出た。。。

「ちよつとよろしくて?」

「え?」

一時限目の授業が終わつて休み時間になつたとき、スバルはとある女子生徒に声を掛けられた。

金髪のブロンドヘアで碧眼の女子で、優雅さが見て取れる。

「近衛さんですね」

「。。。そうだけど。。。ええと。。。確かセシリ亞・オルコッ

トセニ・・でしたっけ?」

「あーり・・。」のわたくしを知つてゐるなんて・・・褒めて差し上げますわ」

「こや・・・。昨日織斑君に大声で問いかけていたし・・・」

昨日セシリアと並ぶ女子は隣の一夏に声を掛けていたので、スバルは耳を傾けていた。

「うう・・・。やうやしたの・・。まあいいですわ・・・。織斑さんと比べるとあなたは少しましのめうですわね」

「ううううう」とへ。

「織斑さんと比べるとあなたは物分りが良い」とですわ

「やうなんだ」

「・・・・馬鹿にしてこらへしゃるの?」

「こや・・。別にそんなことせ・・・」

「まあいいですわ・・。しかし織斑さんも教官を倒したと言ひ」とですが・・あなたもそれは

「僕も倒したけど?」

「な、なんですか?」

セシリ亞は驚いた様子であった。

「いや・・・僕も教官を倒したけど」

「あなたも教官を倒したと言つのですか！？」

と、セシリ亞はスバルに迫る。

「う、うん・・・。なんていうか普通に戦つていたら・・・って、落ち着いて」

「これが落ち着いていられると思つていいのですか！？」

「な、ないかな・・・」

「だったら」

すると予鈴が鳴り出した。

「うつ・・・。話はまた後でしますわ・・・。それまで逃げない」とです

ね

と、セシリ亞はスバルに指差した後に自分の席に向かう・・・。

「・・・な、何なんだろう・・・？」

スバルは田をばちくりさせて、次の授業の準備に入る・・・。

「ではSHRに入る・・・。まず一つ決め事をやらないといけない」

「そうして授業も全部終わって帰りのSHRになつた。

「近々学園で行うクラス対抗戦についてだ。クラスから代表一名を決めなくてはいけない・・・。誰を推薦する」

「はい！織斑君がいいと思います」

「え？」

「私は近衛君がいいと思います」

「へ？」

「と、次々と二人の名前が挙がっていく。

「織斑と近衛か・・・。他に推薦するやつはいるのか」

「異議ありですわ！」

「と、勢いよくセシリアが席から立ち上がつた。

「クラス代表にこのわたくしセシリア・オルコットがなりますわ！男に任せることなんて笑止ですわ」

「・・・・・・・」

「・・・まあいいだろ？・・・。代表候補は三人か・・・。なら織斑、

近衛、オルコットの三名は来週第二アーノナにて代表決めを行つ。それで各自で準備をしておけ」

（・・・なんだか・・・いきなり凄い展開になりそう・・・）

そつしてSHRは終わった・・・

「それにしても・・・こきなり代表候補に選ばれるなんて、やつぱり男子だからかな」

「うーん・・・。やうだううね・・・

そしてスバルは寮の部屋にてゼオラと話しおこなつた。

「でも、オルコットさんと戦うのは結構厳しいよ」

「やうなの？」

「やつややつよ・・・。イギリスの代表候補生なのが候補生に選ばれるつてことは相当な腕を持つているつてことよ」

「やうだよね・・・。オルコットさんのあの自信からすればそつだろ

「うね

「・・・どうするの？」

「・・・何とか少しでも戦えるようにしないといけないから、明日の放課後に第四アリーナでエラの動きとか教えてくれる？」

「わ、わたしが？」

「うん・・・ゼオラも専用機持ちって言っていたしね」

「ま、まあ・・・そうだけど・・・」

と、ゼオラは首に掛けている水色のネックレスを見る。

「専用機持ちならそれなりのことは知っているでしょ？」

「そうだけど・・・私はただデータ収集が目的で専用機を持つているだけだし・・・」

「そりか・・・でもただでさえ少ないエラなんだよ。専用機を持つてことはそれなりの腕と知識があるってことだよね」

「・・・・・・・」

ゼオラはしばらくして・・・・

「わ、分かったわ・・・・。私が教えることは教えるわよ・・・で
も私だけじゃ不安だからもう一人連れて行くわ」

「もう一人？」

「ええ。隣の一組にラトっていつ友達がいるの」

「へえ・・・ゼオラの昔からの友達なの？」

「うん。昔孤児院と一緒にいた子なの。じばらくじとあるHIS研究所に行つたんだけど、昨日会つてきたのよ。

「わうなんだ・・・」

「ラトならHISの知識を私より知つていて思つから」

「そつか・・・それはかなり心強いよ」

「じゃあ明日ラトに言つておくれね・・・一応言つたけど、言つたあなたが遅れないでね」

「分かつているよ。僕もそれなりの期待に応えないとね」

「そうして一人はじめらぐ話をした・・・

Story1 自分ともう一人以外は全員女子（後書き）

新しく作品を投稿しました。。。今後意見など感想を書いてください。

そして次の日の放課後……

第四アリーナにスバルとゼオラ、更にもう一人いた。

パープルのショートヘアをした女子で、背丈はスバルより少し低く、眼鏡をかけていた。

「ゼオラが言っていた子つて、この子のこと?」

「ええ……ラト……今日の昼休みに言つたスバルよ」

「この人が……? ……はじめまして……『ラトウニー・スウボータ』です……」

「ラトウニー……ゼオラから聞いていたと思つけど僕は近衛スバル……よろしくね……ええと……」

なんて呼ぼうかスバルは悩んだ。

「な、名前で呼んでもいいですよ」

「そ、そつか……よろしくねラトウニー」

「は、はい」

そして二人は握手した。

「それにしても・・・訓練機をよく借りられたわね」

ゼオラの視線の先には『ラファール・リヴィアイブ』を装着したスバルの姿があった。

「いやあ・・・。借りる際に書いた申請書がまた沢山あつてね、それで少し遅れたんだよね」

普通ならスバルが書いた以上に申請書を書く必要があるのだが、スバルは男子と言う特別な条件で少ないとのこと・・・

「ふーん・・・まあいいわ」

そしてゼオラは首に掛けている水色のペンドントを握り締めた。

「来なさい・・・ビルトファルケン！」

そしてペンドントが輝きだし、ゼオラはエリアーマーを身に纏う。

身体のラインにぴったりのアーマーをして、背中には四枚の翼を持ち全体のカラーは水色が多く、各所に白が施されていた。頭のデバイスには耳に羽のようなものを装着していた。右手には実弾とエネルギー弾を発射できる大型のスナイパーライフル『オクスタンライフル』を装備していた。

「へえ・・・。それがゼオラのエスなんだ」

「ええ・・・。ビルト・ファルケンよ・・・。高機動戦闘を考慮に入れて射撃戦を得意とする第三世代型のヒュンよ」

「そつか・・・だからアーマーが余計にあるものじゃないんだ」

スバルは感心したようにファルケンを見る。

「じゃあ初めに模擬戦でもやる?」

「うん。ゼオラの腕も見てみたいしね」

「そうなの・・・。じゃあアーマー」

「なに?」

「私たちに戦闘を見てくれる?私は戦闘に集中しているからあんまり見ている暇がないの。だからラトが見て意見を言ってくれる?」

「うん・・・わかった」

そうしてゼオラはスバルに向き直る。

「じゃあ行くわよスバル・・・。言つておくけど手加減はあんまりしないからね」

「僕もそのつもりだよ」

そして両者は臨戦態勢を取る。

「」「一」「」

両者は同時に動き出し、ゼオラはオクスタンライフルを構えた。

「 まず一発！」

そしてトリガーを引き、下の銃口からエネルギー弾を発射した。

「 くつ！」

スバルはとっさに攻撃を避けると、両手にサブマシンガンを展開してゼオラに向け攻撃する。

ゼオラはファルケンの機動力を生かして攻撃を避けていき、オクスタンライフルから実弾を次々と放つていく。

「 さ、さすが・・・。でも・・！」

スバルは右手のサブマシンガンを収納すると、アサルトライフルを展開して左手のサブマシンガンと併用して攻撃していく。

その内数発がファルケンに直撃した。

「 やるわね・・・」

ゼオラは気を引き締めて更にファルケンの機動力を高めてスバルに攻撃を仕掛けていく。

そしてゼオラがスバルの後ろに回りこむと・・・

「 ・・・！」

スバルは顔をゼオラのほうに向けて、一瞬遅れて右腕が後ろを向いてアサルトライフルを放つ。

「くつ！」

ゼオラはとつさに避けるものも弾丸は左脚部に直撃した。

「気付かれた？」

素早い動きでスバルの視界外から後ろに回りこんだが、スバルはそれに気付いていたが、何か違和感があった・・・

「まだいくよ！」

スバルはそのまま振り向いてゼオラに向けアサルトライフルを放つていく。

「くつ！」

ゼオラはいくつか弾丸を受けるも、オクスタンライフルの『Eモード』でスバルに攻撃を仕掛けた。

「ぐつ・・・」

とつさに避けきれず、スバルはゼオラが放ったエネルギー弾を全て受けてしまう。

「これで終わりよ・・・オクスタンライフル・・・Wモード・・・」

そしてゼオラはオクスタンライフルを構えると、上下の銃口から実弾とエネルギー弾を同時一斉発射した。

「うわあああ！」

それによつてリヴァイブのシールドエネルギーが吹きた……

「……はあ……。強いんだね……ゼオラは」

スバルはリヴァイブの装着を解除して地面に座り込む。

「スバルも結構やるわね……。もし少し動きが違つていたらたぶんどうなつていたか分からなかつたわ」

「そつか……。僕もまだまだだね」

「わうかもね……。とにかくラトの意見はどうなの？」

「……」

「ううかとラトゥーーは何か表情が険しい。

「……ラトゥーー」

「あつ……」めん……。ちょっと気になつていたことがあるの

「気になる？ ビビが引っかかるところがあつたの？」

「うん・・・。ゼオラがスバルの後ろに回つ」などときなの

「あの時？」

「スバルはとつさに振り向いたけど・・・。リヴィアイブは一瞬遅れて腕を動かしていたの」

「一瞬遅れてつて・・・」

「・・・たぶん・・・スバルの反応速度にリヴィアイブが追いつけていないと思つ」

「・・・追いつけていないつて・・・じゃあそれがなかつたらどうなつていたの・・・？」

「・・・ゼオラの攻撃は多分当たつていな」と思つ

「当たらないつて・・・私の攻撃が当たらないの?もしスバルに合つたISだつたら」

「うん・・・。動きを見て明らかにリヴィアイブの反応が一瞬遅れているの」

「そりいえは・・・なんだか遅れていたような気がするなあ・・・。リヴィアイブのほうが遅れていたんだ」

「やうなる」

「・・・あんたつて・・・案外凄いんだ」

「うーん……僕はあんまり自覚がないかな……」

「そういうえば、例え反応が遅れていたって言つても動きは良かつたわね……。スバルはISの訓練でもしていたの？」

「いや……。それはしないけど……前に『PS』を扱つていたときがあつたの」

「『PS』？……確かにそれって……」

「ISの技術を応用して作られた……『擬似IS』とも呼ばれる機動兵器」

「あつ、そうそう……。それを扱ついたらなのね……。でもISとアラつて同じなの？」

「基本的にISとほぼ同じだから操縦方法もほとんど同じだけど、ISのコアを使用していないから男性にも扱えるものなんだけど、ISのコアを使用していない分従来のISより性能が劣つている」

「へえ……」

「でも、PSは凄いってある人は言つていたよ

「ある人？」

「うん……。お母さんの知り合いである特殊部隊の人人がこう言つていたの……。『PSはISより性能は劣つてているけど、操縦者の技量次第では最新鋭のISにも匹敵する力を秘めている』って言

つていたの

「へえ・・・

「確かにヤシはヒリ唯一対抗できる兵器だつて言つね

「やうなんだ・・・まあ、それでもスバルの腕は確かにあるわね・・・でもエスが合つていないと少し不便ね」

「うーん・・・やうだね・・・。僕もゼオラのよつに専用機が欲しいな

「たぶん専用機は『えられると思つよ

と、ラトウーニが言つ。

「やうなの?」

「うん・・・。男子でエスを扱える事態特殊な例だから・・・データを取るためにたぶんスバルにも『えられると思つよ

「・・・やうだといいな。ところがラトウーニも専用機を持つているの?」

「ひ、うん・。専用機つて言つわけじゃないけど・・・一応持つていい

と、ラトウーニは左腕にしていた青いブレスレットを見せた。

「へえ・・・ラトウーニもゼオラのよつにデータ収集のためなの?」

「うん・・・私の専用機は大幅に改修中だから代わりに試作機のデータ収集を行っているの・・・今のは改めてデータ収集を行っている『ゲシュペNST MK-? タイプS』なの」

「なるほどね・・・」

「ラトも結構腕はあるのよ」

「へえそなうなんだ・・・じゃあ今度模擬戦を行つときに相手になつてくれる?」

「・・・う、うん・・・いいよ」

「トゥーーーは何かおどおどした様子で答えた・・・

そして次の日・・・

「隣・・・いいかな?」

「ん?・・・ああいいぜ」

昼休みにスバル食堂に来ており、料理を持って一夏の隣に座つた。

「近衛・・・スバルだつたかな?」

「うん・・ そうだよ・・・ 織斑さん」

「俺の」とは一夏でいいよ

「そう?・・・じゃあ一夏も僕のことはスバルでいいよ

「そうか・・・じゃあそうするよ

「でも、なんだか大変なことになつたね」

「ああ そうだな・・・ いきなり代表に選ばれるつて言つてもなあ・・・
自信とかそういうものがあんまりないよな」

「そうだね・・・ でも選ばれたからこなはそれなりの責任があるね」

「責任か・・・ そうかもな

「でも一夏があの織斑先生の弟つて言つ物凄いよね

「そ、そつか?」

「そりや そりや。何だつて第一回モンドクロッゾの優勝者なんだ
よ・・・ 知らない人はいないよ

「・・・ そりだな・・・

「でも第一回は決勝戦前でまさかの棄権だからね・・・ 僕も見ていて驚いたよ。一体どうしたんだろ?」

「…………」

すると一夏の表情が曇る。

「あつ、『ごめん……僕悪い』ことを言ったかな?」

「い、いいんだ……。気にしないでくれ」

「や、やう・・・?なら、いいんだけど……」

スバルはどうも申し訳なさそうだった……

「・・・隣・・・・いいか?」

と、少しして一人の女子が来た。

「ああいいぜ篠」

そうして篠と呼ばれる女子は一夏の隣に座った。

「IJの人は?」

「ああ・・・。俺の幼馴染の篠だ」

「・・・篠ノ之篠だ」

「へえ・・・。僕は近衛スバル・・・よろしくね」

「・・・あ、ああ」

「そりいえば……篠ノ之つて……あの篠ノ之博士の……」

「ああ。 篠は束さんの妹だ」

「へえ……。 そりなんだ」

「……」

篠はスバルを睨む。

「……ええと……僕何か悪いこと言つたかな?」

「……なんでもない」

と、篠はそのまま飯を食べた……

そして昼休みが終わって五時限目……

「授業の前に、織斑、近衛には一つ伝えることがある

授業が始まつてすぐに織斑先生はいりこつ。

「学園で用意できる予備機がない……。そのため一人には専用機が
『えりれる』ことになつた」

「え？」

「へ？」

「一人はどうも理解できていないが……

「えー？」この時期に専用機を！？しかも一年の時に？」

「それって政府からの支援が来るってこと？？」

「いいなあ……私も専用機が欲しい」

と、教室中が騒いだ。

「ええと……どういふこと？」

バーン！と一夏は織斑先生に出席簿で叩かれた。

「教科書六ページを読め」

「え……は、はい……ええと

長いので省略……

「つまりはそういうことだ。本来なら専用機は企業の所属か各国の代表、もしくは代表候補生にしか与えられない……が、お前たちは事情が事情だ……。データ収集を目的に専用機が与えられる。わかつたか」

「は、はい」

「わかりました」

「だが、織斑の専用機は少し時間が掛かる・・・が、近衛の専用機は一足早く到着する予定だ・・・。そのため代表決めでは最初にオルコットと近衛が対戦するようになつた」

「僕が・・・最初に・・・？」

スバルは実感がわからなかつた・・・。

「凄いじゃない。スバルも専用機がもてるようになつたわね」

「う、うん・・・。ラトゥーの言つ通りになつたね」

そうして夜になつてスバルとゼオラは自室にいた。

「そういえば、授業が終わつた後に織斑先生に呼ばれたけど、なんて言われたの？」

「うん・・・。僕の専用機はビッグもある研究所から送られた試作型のIISだつて」

「ふーん・・・。別にいいじゃない。私のやラトのIISも試作型なん

だし」

「こや、 なんてこつか・・・ ただの試作型じゃないらしい」

「ビハビハ」とへ。」

「なんだか学園側も詳細を知られていないエラだつて」

「詳細を? 何だかおかしいわね・・・ 普通HSのデータぐらい教えるはずなんだけど」

「やうなんだよね・・・。でも結構凄いエラしこよ」

「ふーん・・・。まあでも専用機がもらえたことだけでも凄いことだし、専用機を十分に使っこなせるようになつたら、また対決しましょ」

「うそ。僕もロベンジするよ」

「それにしても、こきなつオルコシトセんと戦ハルヒシなんのなんですね」

「うん。僕も思つていなかつたよ」

「でも、私はアリと観客席から応援してこるよ」

「あつがとつ・・・。そつまでしてひつと責任が重いね

「やうね・・・。でも、それだけ名前はあるよ」

「やつだね・・・。やるだけの」とは頑張るよ

「その意気よ」

そうしてゼオラはスバルに向けてグッとした。

「しかし・・・本当にようしかつたのですか?『レッド』を送り出して」

「ああ。今は力が必要とする事態だ・・・」

「」はとある研究所・・・。そこで一人の男性が話していた。

「とはいっても、あの機体はかつて重大かつ最悪な事故を起こしたHSと同じ系列のHSなんですよ。もし『やつら』にばれたりすれば・・・」

「その心配はない・・・。もつやつらはあの機体のことは存在しないと思つてゐるだろ?」

「ですが・・・」

「それに、『レッド』には改裝を加えている。すぐには分からぬようにしている」

「…………」

「それと、『R-1』はどうなっている」

「R-1はロールアウトした後に操縦者を探しているのですが・・・なぜか我々が挙げた候補すべてをR-1自身が拒んでいて、中々研究が進展していません・・・しかしISが操縦者を拒むとは・・・ありえない」

「・・・R-1は自身が選んだ操縦者しか認めない・・・そういう風に作り上げている」

「なぜそんなことを・・・。それではあまりにも効率が悪いですよ」

「それでいいのだ・・・。R-1は『SRX計画』の要となる機体だ」

「・・・ですが」

「その心配は要らない・・・。R-1の操縦者に相応しい人物を知っている」

「操縦者に相応しい人物とは?」

「かつて第一回モンドクロッゾで決勝戦まで勝ち上り、棄権での優勝をした選手の息子だ」

「まさか・・・R-1には男性を乗せると呪つのですか?ですがそれ

では

「確かにHSは女性にしか反応しない・・・。だが、完全に反応しないわけではない」

「・・・それは・・・最近現れたHSを扱える男子がいるからですか？」

「やうだな・・・。とりあえず、計画を進めてくれ・・・」

「・・・イングラム少佐・・・。あなたは一体・・何をしようとしているのですか」

「・・・いずれ・・・分かる時が来る・・・」

そうしてイングラムと呼ばれる男性は研究室を出た・・・

Story2 専用機（後書き）

次回主人公機が登場。ちなみにいうと、なぜラトゥーニがゲシュペンストMK-? タイプSだというどのは、後に分かれますよ。

Story クラス代表決定戦

やつして時間が過ぎてクラス代表を決める対決の日が来た……

「どう~今の気分は」

「……うーん……なんだか自信がないなあ……」

HS学園内にあるHSアリーナのピットにスバルとゼオラがいた。

「自信を持つて……。今まで色々としてきたでしょ」

「やつだけど……。せっぱり本番になると不安になるんだよね」

「うーん……せっぱりやつよね……。でも、スバルのHSって一体どんなものなんだろ?……。なんだか楽しみ」

「うふ……。少し不安はあるけどね……」

と、話していくと……

「近衛君……来ましたよ」

と、奥から山田先生が来た。

「近衛君の専用機が」

そしてピットの搬入エレベーターが上ってきて、一体のHSが姿を現した・・・

「これが・・・」

スバルはゆっくりとそのHSに近付いた。

全体のカラーリングは紺がメインで、薄い部分と濃い部分があった。背面には折りたたまれた翼があり、片方ずつに三枚、計六枚の翼を持つていた。全体の形状としては直線ラインが多いものであった。

「・・・・・・・」

そしてHSに触れると、HSから光が出てきて、反応を示した。

「・・・・・」

するとHSが展開して受け入れ態勢を取つた。

「HSの名称は不明で、その性能も聞かされていませんので、氣をつけて使ってください」

「は、はい」

「では、急いで装着して下せ。・・・既にオルコットさんがアーナで待っています」

「わかりました」

そしてスバルは急いでESを装着した。

「・・・・・」

装着し終えたスバルは立ち上ると、感覚を確かめる。

装着して分かることがだが、額には出っ張ったバーツを付け、耳にはデバイスが装着されていた。そして両肩にも横に少し伸びた装甲を装着して、腰にもリアアーマー、サイドアーマー、フロントアーマーを装着していた。

「・・・リヴァイブより・・・身体に馴染む・・・」

そして数歩前に出て、ピットのカタパルトに足を置く。

「スバル・・・頑張つて！」

と、ゼオラはスバルに手を振った。

「うん・・・。頑張るよ」

そして前かがみになると、カタパルトが動き出して、そのまま外に飛び出し、それと同時に背中のウイング三枚を展開した。

「T-LENSシステム・・・稼動開始・・・レベル1」

「やつしてアリーナに出ると、すでにセシリアが待っていた。

「こきなりあなたと戦つことにになりましたね・・近衛さん」

「そうだね・・・。僕も意外だよ」

「ですが・・・この戦いでわたくしが勝つことは田に見えています
わ・・・」
「で降参でもしますか?」

「それは断るよ・・・。何もしないで負けるのだけは『ゴメンだね』

「やつ・・・。でしたら」

と、セシリアは大型のライフルをスバルに向けて構えた。

「お別れですわ!」

そしてトリガーを引きエネルギー弾を発射した。

「つー!」

スバルはとつせんにエネルギー弾をかわした。

「初弾をかわすなんて・・・。ほめて差し上げますわ・・・。しかし・
・」

そしてセシリアはそのままエネルギー弾を連続して発射した。

スバルはかわすので精一杯だった。

「さあ、踊りなさいー」このセシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でるワルツで！」

「くっ！・・・ゼオラより精密な射撃・・・やはり代表候補は一味違つ・・・」

スバルはセシリアの射撃をかわしていくのも、一発が左肩に直撃する。

「ぐつ・・・！・・・何か武器は・・・」

と、検索すると、『フォトンライフル』が表示された。

「・・・ライフルか・・・まあやるしかない！」

そしてスバルは右手にフォトンライフルを展開するとセシリアに向けてトリガーパーツを引く。

「凄い・・・訓練のときより断然動きが違つ・・・」

「確かに」

ゼオラはアトカーニとピットのモニターでスバルの戦いを見ていた。

「アーティストの才能を發揮するためには、アーティスト自身の才能が不可欠です。」

「・・・・・あのI.S.・・・スバルの異常なまでの反応速度に・・・追いついている・・・。いや、それ以上に動いている・・・」

「そこまで・・・あのHS・・確かに普通じゃないわね」

ゼオテはそのままモニターを見た。・・・

【T-LINKシステム・稼働率・レベル2】

そして戦闘開始して十数分が経過した・・・

「ほめて差し上げますわ・・。初見でこのブルー・ティアーズどこまで戦つたのはあなたが初めてですわ」

「…………そればどうも」

「でも・・・そろそろ本気でいかせて貰いますわ！」

そしてセシリアは両肩の浮遊ユニットからビットを一基射出してスバルに攻撃を仕掛けた。

「...ル・テ・シ・ル」

スバルは迫つてくるビットの攻撃をかわしていき、フォトンライフルSのトリガーを引く。

「くつ・・・！」

しかしビットは細かく動いていき、弾丸を避けていき、エネルギー弾を放つてくる。

「ここのまじや・・・・・」

「T-LINKシステム・・・稼働率・・レベル3・・・・」

「つー」

するとなにかが頭を駆け抜け、勘が冴えてきた。

そしてスバルの後方にビットが回り込んだ。

「貰いましたわ！」

そしてビットにエネルギーが充填し始めた。

「・・・・・」

すると、スバルは身体を捻らせて、後方にいるビットに向けフォトンライフルSのトリガーを引き、弾丸はビットを撃ち抜いた。

「えつ！？」

セシリ亞が驚いている間にスバルはもう一基を撃ち落とした。

「あの状態から命中させた！？」

そしてスバルはフォトンライフルSを放ちながらセシリ亞に迫る。

「くつー！」

セシリ亞はスター・ライトMK-?のトリガーを引き、スバルに攻撃を仕掛ける。

スバルはフォトンライフルSを放っていくが、次の瞬間鈍い音がした。

「・・・・・・しまつた！？」

モニターには弾切れが表示されていた。

「弾切れとは・・・迂闊ですわ！」

そしてセシリ亞はそのままスター・ライトMK-?のトリガーを引き、エネルギー弾を放った。

「T-LINKシステム・・・稼働率・・・レベル4・・・」

二二二

誰もが命中すると思われたが・・・スバルは身体を少しずらして、迫つてくるエネルギー弾をかわした。

—そ、そんな！？

セシリ亞はかわされたことに驚いていた。

「武器は？」

スバルはフォトンライフルSを収納しながら武器を検索すると、二つの武器が表示された。

「マシンガンとナイフか・・・まあ武器がなによりましたけどね」

と、スバルは右手に『M950マシンガン』を展開してセシリ亞に向かっていく。

「くつ・・・今のはまぐれですわー。」

セシリアはビットを更に一基射出して攻撃してきた。

スバルは回避しながらM950マシンガンのトリガーを引いて弾丸を発射してビットを一基撃ち落とした。

「分かつたよ・・・この武器の弱点が！」

「フ！？」

「Jの武器は君が命令を下さないと攻撃しない・・・。その間君は動けない！」

そしてスバルはマシンガンを放つていい、セシリアに命中させていく。

「くつ・・・弱点を見抜いたことはいいじょう・・・ですが・・・

」

と、セシリアはスター・ライトMK-?を放つと、その直後にビットをスバルの後方にやつた。

スバルはエネルギー弾をかわすと、左手に『コールドメタルナイフ』を展開してそれを後方にいるビットに投げつけた。

「気付かれていた！？」

そしてビットに突き刺さったナイフをスバルはとっさに掴んでそのままビットを切り裂いた。

「これで全部だね」

そしてスバルはマシンガンを放ちながらセシリアに急接近して、コールドメタルナイフをセシリアに振り下ろした。

「くつ！」

セシリアはとっさに左手にブレードを展開した。

「「」のわたくしに剣を使わせるなんて・・・」

「「」れなう」

「ですが・・・まだですかよ」

「え?」

「「」シタは全部で六基ありますよ。」

ヒ、セシリアは両サイドから砲身を出してスバルに向けた。

「しまつー。」

スバルはまだそこ離れようとするが・・・

「もう遅いですわー。」

そしてセシリアはミサイルを発射して、スバルに向かっていく。

「へつー。」

そしてミサイルが命中して爆発した・・・

「あつー。」

ピットのモニターを見ていたゼオラが声を上げる。

「・・・心配ないよ」

「え？」

ゼオラは再度モニターを見ると・・・

「！」これって！？」

そして煙が晴れると、そこには形狀が変化したIHSを身に纏つたスバルの姿があった。

「！」これは・・・？」

スバルは腕を退けると、形狀が変わっているIHSに驚いていた。

基本的に直線のラインの形狀は変わっていないが、脚部と腕部の装甲表面のデザインが変化しており、腰のフロントアーマーがリアアーマーと同じ形狀になり、額のパーツからは黄色のV型アンテナが追加されていた。大きく変化していたのは背中のパーツであり、六枚の翼は無くなり、代わりにスラスターがもう一基追加され、コントローラーが新たに追加された。

フィッティング

「最適化を完了しました・・・及び、T-LINKシステム稼働率レベル5に移行・・・システムの完全稼動を確認しました・・・」

すると、ISの足からカラーが徐々に変化していき、紺から赤いカラーリングに変化した。

「ま、まさか……第一形態^{ファーストシフト}移行！？・・・あ、あなた・・今まで初期設定で戦っていたと言うのですか！？」

「・・僕にもよく分からぬけど・・・これでこの機体は僕の専用機になつたわけだね」

そしてスバルは右手に『マグナビームライフル』を展開した。

すると、モニターに『データが表示された。

「ヒュッケバイン・・EX^{エクストラ}・・？これが・・」のISの名前・・

その間に更新されたデータが流れていき、ある程度流れたらウインドが閉じた。

「くつ・・・いら第一形態^{ファーストシフト}移行をしたところで…」

と、セシリ亞はスター・ライトMK-?を構えるとトリガーを引いてエネルギー弾を発射する。

しかしスバルはそこから動かず、身体を少し横にずらしてエネルギー弾をかわした。

「見える！」

そしてスバルはマグナビームライフルをセシリ亞に向けながら脚部

後部の装甲を展開して高速で移動した。

「は、速い！？」

セシリアはエネルギー弾を次々と放つが、スバルには当たらない。その間にスバルもマグナビームライフルを放ちセシリアに次々と命中させていく。

「ぐつ・・・・・先程より命中率が上がっている！？」

セシリアは何とか避けるが、避けきれてなかつた。

「マルチトレースミサイル！」

そしてスバルは背中のコントナを開き、そこから無数のミサイルを発射した。

「ぐつ！」

セシリアはミサイルから逃げながらスター・ライトMK-?-で撃ち落していく。

「いや、こんなものでこのわたくしを・・・・・

「それはただの囮」

「えつ！？」

セシリアは声がしたほうを向くと、そこに右腕に『グラビトン』

イフル』を展開してセシリアに向けていたスバルがいた。

「これで終わりだよ！」

そして、グラビティンライフルの銃口から黒っぽいビームが発射された。

「つー」

そしてビームはセシリアに直撃すると、ブルー・ティアーズのシリードエネルギーが尽きた・・・

『試合終了！ 勝者・・・近衛スバル！』

「な、なんとか・・・かつ・・・」

スバルは一旦地面に着地すると、突然めまいが襲つた。

倒れそうになるも何とか踏ん張つた。

「や、やつぱり・・・なんか慣れないなあ・・・と、とりあえず・・・ピットに戻るかな」

と、スバルはそのままピットに戻つていった・・・

「ま、負けた・・・このわたくしが・・・」

セシリ亞は地面に四つんばいになつて落ち込んでいた・・・・・

「・・・・・悔しいはずなのに・・・」

セシリ亞は悔しいはずだが、何か別の感覚があつた。

「・・・なぜ・・・悔しくないの・・・むしろ・・・」

と、セシリ亞はスバルの顔を思い出す・・・

「・・・負けても・・・よかつた・・・?」

そうして考えながらセシリ亞はピットに戻つていつた・・・

「おめでとう、スバル！」

「ゼオラ・・・ラトゥーー」

スバルがピットに戻ると、ゼオラとラトゥーーが迎えてくれた。

「それにしても戦闘の最中で第一形態移行を行つなんて

ファーストジワル

「うーん・・・僕も思つていなかつたな・・・

「でも、結構凄かつた・・・。EISを扱つてどうだったの?」

「やつぱりヴァイブよりいいな・・・。僕の反応速度に追いついているし、身体にも馴染んでいる・・・」

「もう・・・」

と、話していると・・・

「盛り上がりしているようだな・・・」

と、後ろから織斑先生が来た。

「織斑先生」

「近衛・・・戦闘から帰ってきたといひすまんが、次の対戦がある

「え？ 対戦つて・・・」

「ああ。織斑の専用機が到着した。今は装着中だ

「そうなんですか」

「お前にはHSの補給を行い、完了次第アリーナに行つてもう。そこで織斑と対戦だ」

「は、はい」

そしてスバルはピットの隅にある補給所に行き、HSの補給を開始した・・・

そしてじばりくしてスバルは補給が完了してアリーナの中央まで来た。

その後に専用機を身に纏つた一夏が来た。

「お前といひして戦うことになるとな」

「僕も思つていなかつたよ・・・。そのへりつてなんて言ひの?」

「・・・『ひやくじき白鬼』だ・・・。お前のも結構す』」のか

「せうだね・・・。話はれへりうにして、遠慮はしないよ、一夏」

と、スバルは両手に『M950マシンガン』を展開した。

「ああ。俺もそのつもりさ」

そして、試合開始のブザーが鳴った。

開始と同時にスバルはM950マシンガンを掃射した。

「くつー。」

一夏はとつたに避けるが、最初の弾丸は直撃した。

「逃がさないー。」

スバルはそのままマシンガンを横に逃げていく一夏に放っていく。

「くつ・・・何か武器は・・・

と、一夏は武器の検索をすると『近接ブレード』が表示された。

「これだけかよー・・・まあ素手でやるよつはましか!」

一夏は右手に近接ブレードを展開するとスバルに向かっていく。

スバルはマシンガンを放ちながら後退して距離を保つ。

「・・・そろそろ弾が切れるかな」

と、スバルはマシンガンを収納すると、左手にブレードを鞘(くわ)と展開した。

「シシオウブレード!」

スバルは鞘から日本刀型のブレードを抜き放つと、鞘を収納して一夏に向かっていく。

「でえい!」

そして両者のブレードが交じり合い、火花を散らす。

「やるな・・・スバル」

「一夏もね・・・太刀筋はいいみたい・・・でも・・・」

そしてスバルは一夏を押し返すと右足後部の装甲を展開してスラスターを噴射させて一夏に回し蹴りを入れた。

「ぐつー！」

「はあああー！」

そして回転しながらシシオウブレードを振るい、一夏を切りつけた。

「ぐああつーー？」

そのまま地面に向かつて落ちていくが、何とかぶつかる直前に踏ん張った。

その間にスバルはシシオウブレードを収納して、マグナビームライフルとM950マシンガンを展開して一夏に放つ。

「ぐーぐそつーーー俺が白式の反応速度に追いついていないーーー

一夏はそのまま回避をするが、その動きはあまりにも無駄が多かつた。

「ここのまま決めるかなーーー。マルチトレースミサイル！」

と、スバルは背中のコントナを展開して、ミサイルを発射した。

「ま、マジかよーー？」

一夏は慌てて逃げていき、近くまで来たミサイルを切り落としていくが、最終的に多数のミサイルを受けてしまった・・・・・

・・・・・

ピットのモーターからゼオラとラトウニー、織斑先生が見ていた。

「ふう、馬鹿者が、機体に救われたな、

え？

— ● ● ● ● ●

そして煙が晴れると、そこには形状が変わった白式がいた。

第一形態移行

スバルはマグナビームライフルとM950マシンガンを収納して、シシオウブレードを開発した。

「・・・これは・・?」

一夏は一瞬分からなかつたが、すぐに理解した。

「・・・何だか分からぬが・・・これでこいつは俺の専用機になつたつてことか?」

「セウコウ」とだね

と、スバルはシシオウブレードを構えた。

そして一夏は右手に持っていた武器を見る。

「・・・これって・・・」

すると、その武器のデータが流れた。

「・・・『雪片式型』？・・・雪片つて千冬姉が使っていた武器と
同じ名前じやないか・・・全く・・俺は最高の姉さんを持ったよ」

と、一夏は雪片式型の刀身を展開してビームの刃を出した。

「いぐぞ、スバル！」

「こつでも！」

そして両者は一気に飛び出し、ブレードを振つ上げた。

すると、スバルはとつとつシシオウブレードを振るひのをやめると、
両脚部後部を展開してスラスターを噴射させて回避した。

「な、なに？」

「・・・・・」

一夏も予想外の動きに戸惑っていた。

「くつ、回避するなり・・また当たれば　」

と、再びスバルに接近しようとした瞬間・・・・・

『試合終了！・・・・・勝者・・近衛スバル！』

「え・・・・・？」

「・・・・・・・・」

すると、試合はなぜかスバルの勝利に終わった・・・・・

「な、なんで・・・？」

一夏だけ理解できていなかつた・・・・・

「全く・・あれだけ盛り上げておいてこの結果か・・大馬鹿者・・・・

「す、すいません・・・・」

ピットに戻ると織斑先生からまず一言がこれ・・・・・

「武器の特性を把握していないからだ・・・。今後は時間が空いてい
るときはISの訓練に励め・・いいな」

「はい・・・

と、うなだれる一夏・・・・・

「え、ええと、一人のI-Sは今待機状態になつていていますが、呼び出せばすぐに使えます。あ、でも規則はありますからね・・・・・はいこれ」

と、山田先生は一夏とスバルに分厚いI-Sの規則書を渡した。

ちなみに一夏の白式の待機状態は右腕にガントレットとして装着されていた。

一方のスバルのヒュッケバインEXの待機状態は赤くEの形をして左腕に下げられているキー・ホルダーであつた。

「まあなんにせよ、今日はまじこれで終わりだ・・帰つて休め

「はい」

「わかりました」

と、一人はそれぞれ寮に帰つていった・・・・・

「やつたねスバル！」これでクラスの代表だね

「うん…。うだね

そうして時間は夜の八時半を回っていた…。

「でも、なんだか実感がわかないな…。」

「最初はなじょうね…。でも慣れるよ

「…。」

「それこじても…。」

と、ゼオラは背伸びしたり、腰を回し始めた。

「どうしたの？」

「いやあ…。なんだか疲れが溜まったのかな…。なんだか背中や腰がきつこのよね

「…。やうなの…。じやあ横になつて」

「え？ どうして…。」

「僕がマッサージをするよ。こいつ見えても得意なんだ

「やうなの…。じゃあお願ひしようかな

と、ゼオラはベッドに向向になつて寝た。

「おへこめせじ」

と、スバルはゼオラの腰に手を置いて少しづつ押していく。

と、とても気持ちよさそうだった。・・・

「次は背中だね」

そしてスバルは背中のほうに手をやつて揉むようにして手を動かす。

「くう・・・！結構効くう・・・本当にマジサービがうまいのね」

うん・・・慣れたからかな・・・

慣れた?

うん・・・。#11「このひとをやっていた」とがあつたんだ

「え……どうやったの?」

・・・実はね・・・少し前まで執事をしていたんだ」

— · · · ^ ? · · 執事 ?

一
うん・
実はね

L

「……そんなことが……あつたんだ」

「うん……僕はそれからお母さんのおじさんの家に預けられたんだ。おじさんはある家の執事をやっていたから、僕はその見習いとして働くことになつたんだ」

「そりなんだ……」

「僕はそこでその家の長女に田をつけられてね、それから中学生三年間ずっとその人の執事をすることになつたの」

「へえ……だから面倒見がいいんだ」

と、ゼオラは今までの口をさかのぼつて思い出した。

部屋の片付けと掃除はもちろん、お茶が欲しい時になると必ずスバルがお茶を入れてくれるこことやなど、そんなことがあった。

「うん……今でも執事の礼儀は忘れていないよ」

「ふーん……で、スバルを執事にしたのって誰なの?」

「…………」

するとスバルは黙つた。

「……それは……秘密」

「ええ……? なんで……教えてよ」

「だめ」

「別に誰にもいわ……つて、痛い痛い……」

と、スバルは手に力を入れて更に指を立ててゼオラの腰を強く押した。

「わ、分かった！もう聞かないから！」

そしてスバルは力を抜いて、優しくマッサージを続けた。

「うう……そこまでしなくとも……」

「ごめんね……（……その人がここ）の生徒会長をやつているって……
・言いくといよな）」

そうしてしばらくなマッサージを続けた……

そして次の日……

「……では、一組の代表は近衛スバル君に決定しました」

朝のSHRでクラス代表が決まったことが発表された。

「……これからも……よろしくお願ひします」

スバルは席を立つと後ろを向いて挨拶した。

「あれ？」

そこでスバルはあることに気付いた。

よく見ればセシリアがいない。

（どうしたんだろう・・・？）

スバルは疑問に思つて、山田先生のほうを向く。

「あの・・・オルゴットさんですか？」

「オルゴットさんですか？連絡によれば体調不良だと聞いています
が・・・」

「やう・・・ですか」

スバルは後で見舞いに行こうと覚えて席に座つた・・・

「ええと・・・オルゴットさんの部屋は・・・」

そして放課後、スバルはセシリアの見舞いに行くため寮の廊下を歩いていた。

「エリかな？」

そうして他の人からの情報を頼りにして、セシリアの部屋の前に来た。

「うーん……エリまで来ておいて気が引けるってなんだかなあ……」

そしてスバルはドアをノックした。

「……誰ですの……？」

「僕だよ……スバル」

「……スバル……さん？」

「うん……。今日の朝からいないうちちょっと心配で来たんだ」

「……そう……ですの……入つてもいいですよ」

「分かつた……（……ん？さつき僕のことを名前で呼んだ？）」

そう思いながら、スバルは部屋に入ると……

（うわあ……エリや凄い……）

スバルは部屋の中で驚いた。

部屋の大半がベッドで占められていた。

そのベッドもまさに姫様が寝るようなもので、かなり豪華だった。
・

そのベッドにセシリアは寝ていた。

どうも本当に体調が悪いのか、顔色が悪い。

「大丈夫なの？」

「え、ええ……。大丈夫ですわ」

「そつか……。よかつた……」

「……どうして……来てくださったのですか？」

「どうしてって……それは来るよ。昨日まで元気だったのに、急に体調が悪くなつたら心配するよ」

「そつか……ですか」

「……でも、本当に大丈夫そつでよかつた」

「……」

すると、セシリアの顔が赤くなつた。

「……あ、あの……」

「ん？」

「・・・セシリ亞に置いてあるお飲み物を・・・といっただけませんか?」

「・・・いこよ」

と、スバルはテーブルの上に置いてある飲み物を取つてセシリ亞に渡した。

「あ、ありがとうございます」

「どういたしまして」

セシリ亞は一口飲むと、スバルを見る。

「・・・」

「どうしたの?」

「い、いえ・・・なんでもありますん」

「もう・・・じゃあ大事にね」

と、スバルは部屋から出でるとすると・・・

「あ、あの・・・」

「何でじょつか?・・・オルゴットセー

「・・・わたくしの」とセシリ亞と呼んでトセー

「え？ うん……それで、セシリア……何の用？」

「……色々と……ありがとうございます」

「……別に……いいんだよ」

そうしてスバルは部屋を出た……

その頃……

「イングラム少佐……ヒュッケバインEXの起動を確認しました」

「そりか……起動できたか」

「しかし……本当によかつたのでしょうか？」

「もちろんだ……それより、R-1はどうなった」

「少佐の言った人物と……適合しました」

「そりか……その後は？」

「R-1の操縦者として登録して、近日TTS学園に転入させる予定

です「

「・・・エリ学園か・・・」

「・・・それにしても、なぜ『レッド』を・・・?」

「・・・・・いつか分かる・・・。やつらと戦つために・・・必要な存在だ」

「・・・そりですか・・・では、準備のほうを進めておきましょう」

「ひして男性は研究室から出た・・・

「・・・・・・」

「イングラムは一息つくと・・・・・

「近衛スバル・・・希望と絶望の力・・・使いこなして見せり・・・・」

「

「ひしてイングラムは研究室から出た・・・・・

Story3 クラス代表決定戦（後書き）

ヒュッケバインEXの初期段階の姿はエクスバインをイメージしていますが、第一形態移行した後では紅いヒュッケバインMK-?をイメージしています。後様々なオリジナル機能が付いています・・・。

「二二二号工場園のグラウンド……

「では、これよりEISの基本飛行操縦を実践してもらひ。まずは専用機持ちの見本を見せる。オルコット、織斑、近衛、シュバイツァー。前に出る」

と、織斑先生に呼ばれて四人は列の前に出た。

(・・・ヒュッケバインEX)

スバル左腕にあるヒュッケバインEXの待機状態であるキー・ホルダーに手を当てて、心の中で名前を呼ぶと、EISアーマーを身に纏つた。

それと同時にセシリ亞とゼオラもEISアーマーを身に纏つて、少し遅れて一夏もEISアーマーを身に纏つた。

「では、始める」

そして四人は同時に空に飛び上がった。

『いいした。お前のヒツのほうがスペックは高いのだ。もっとスピードを上げてみる』

「そ、そう言われても」

空を飛んですぐに纖斑先生からそれだつた・・・

『一夏。もつと空を飛びイメージを強めてみたり?』

「うーん・・・。イメージを強くつけていつでも・・・」

『スバルさんの通りですわ。所詮イメージはイメージですわ』

「イメージねえ・・・」

と、空を飛んでいると・・・

『そろそろこいだらう・・・。今からお前たちには急降下をやつてもらひ』

と、纖斑先生から言われて、スバルとセシリア、ゼオラが先に降下を開始した。

「よし・・・俺も・・・」

と、一夏は降下を開始したのだが・・・

「・・・え?」

するとスバルの横を一夏が猛スピードで過ぎてこくと、グラウンド

の地面に激突した。

「誰がグラウンドに穴を空けたと言つた馬鹿者」

「すみません」

と、穴から一夏がゆっくりと出でた。

「まあいい。……そして、次は武装の展開だ。それぞれやって見せろ」

「は、は」

と、一夏は頭の中で自分の武器を思い浮かべて、右手にブレードを展開した。

「よし……」

「熟練した操縦者なら一秒も掛からん……もつと早くしや」

「は、はい……（これでも駄目かよ……）」

「次、オルゴット」

「わかりましたわ」

と、セシリアは一夏より早くスタートライトMK-?を展開した。

「さすがだな・。だがその横に向けて撃つポーズはやめる。それで誰を撃つと言つのだ」

「で、ですが・。」これはわたくしのイメージを固めるために

「直せ。いいな

「・・わ、わかりましたわ・。」

織斑先生の威圧に押されてセシリアは渋々返事した。

「次、近衛」

「はい」

と、スバルは右手にマグナビームライフルと左手にM950マシンガンをセシリアより少し遅いが、一夏より早く展開した。

「別々の武器を同時に展開するのはさすがだな・。しかし、展開するスピードを速めろ」

「わ、わかりました・。」(うわあ・。・厳しいな)

「次、ショバイツアー」

「はい」

そしてゼオラは右手にオクスタンライフルをセシリアと同じくじがらの速さで展開した。

「展開スピードはいいな・・・だが、銃身を下げる状態で展開するクセはやめる」

「そ、そうですか・・・」

ゼオラは少しがつかりしたようだつた。

「・・・時間だな、今日はこれで授業は終わりだ。織斑、グラウン
ドに空けた穴は埋めておけよ」

「は、はい」

と、一夏がスバルのほうを見るが、スバルはもう帰つていた・・・

そうしてその夜・・・

「ふーん・・・。ここがIS学園か・・・」

IS学園の正面門の前に、小柄な女子がいた。

ツインテールにした髪は夜の風になびいており、その根元には金色の髪留めが月の光で鈍く光つていた。

「さてと・・・受付にでも行きますか・・・」

と、体格に不釣合いなぐらい大きなバックを掛け直して、I.S学園の中に入る。

(・・・あれ?)

そしてその女子は受付がある事務所に入つて、あるものを見る。

(・・・男?)

受付には一人の男子があり、受付の人と話をしていた。

(・・・しかも・・I.S学園の制服を着ている?)

その男子はI.S学園の男子の制服を着ており、背中には少し大きなリュックを背負つており、背は自分より高いだらう。

と、様子を見ていると・・・

「　　はい。これで受付は終わりました。I.S学園によつこそ、伊達リュウセイ君。あなたがこの学園で三人目になります」

そしてリュウセイと呼ばれる男子は受付の人に手を振つて、受付横にある出口から外に出た。

(三人目?・・・もう学園に一人いるんだ・・。でもその一人は・・。)

そしてその女子は微笑むと、受付のまつに向かひ……

「ふわあああ・・・」

スバルは大きなあくびをして、宿題をする。

「ねえ、スバル」

するどゼオラが聞いてきた。

「どうしたのゼオラ?」

「やつにいえば明日スバルのＨＳの開発責任者が来るんでしょ?」

「うふ・・・。そうだけど・・・。聞いていたの?」

「そりゃ・・・あの時近くにいたしね」

今日の帰りのＳＨＲが終わって、織斑先生から呼ばれて、明日の放課後にはスバルのＨＳの開発責任者が来る」とを伝えられていた。

「どうせやつで僕のＨＳのことを伝えるみたい」

「そうなの。まあずっとＨＳのことが分からなこまじや、不便だからね

「うん。まだＥＸは使ひこなしてこてわけじゃないからね。本

本当に助かると思つてゐるんだ

「そつか・・・」

そしてゼオラはベッドに腰をかけると、カバンからレポートが入ったファイルを取り出して内容を見始めた。

「さてと・・・。僕も宿題を終わらせるかな」

スバルも宿題に向き直ると、黙々と進めていく・・・・・

「ねえねえ聞いた？ 転校生の噂」

と、朝から女子トークはそれで持ちきりだつた。

「転校生？ こんな時期に？」

「そうなのよ。しかも隣のクラスに一人もよ

「二人？」

しかし、HS学園への転入は結構厳しく、国からの推薦がないと中々入れない・・・。となれば・・・

「一人は中国の代表候補生なのよ。しかもね、もう一人つて言うの

が
「

と、その女子は息を吸つて・・・

「男子なのよー。」

「ええええー?」と女子一同驚きの声を上げる。

「隣のクラスにも男子が・・・」

「俺たちと回じ境遇のやつかな?」

「やつだと思つたび・・・代表候補生?」

代表候補生といえば・・・

「あら?」のわたくしの尊を聞きつけられたのかしきり

と、セシリ亞はお決まりの腰に手を当てるポーズをした。

「でも代表候補生か・・・。やっぱ専用機を持つのかな?」

「気になるのか?」

「少しね・・。興味があるな」

と、言つと・・・。

「へえ・・・。言つてくれるじゃない」

と、教室のドアのほうから声がして、スバルと数人はドアのほうを向く。

そこにいたのは、ドアにもたれかかって、腕を組んでいた昨日の女子だった。

「・・・鈴？お前・・・鈴か？」

すると、驚いたかのように一夏がその女子に問いかける。

「わつよ。一組の代表、及び、中国の代表候補生、凰鈴音・・・」うして一組に宣戦布告を言いに来たつてわけ

「・・・なに格好つけてんだ？似合わねえぞ」

「なつ！何言つてんのよ！」

と、鈴と呼ばれる女子は顔を赤くして怒る。

「邪魔だ」

「何よ！？」

と、後ろを振り向くと、顔が青ざめた。

「あ、千冬さん！？」

そして織斑先生の出席簿アタックが決まり、ツインテールが宙を舞

う。

「リリでは織斑先生と呼べ」

「は、はい・・・」

「それより、こつまでつゝ立つてゐる」

「は、はい・」

と、鈴はあわてて避けると、教室を出る。

「・・・何なんだろ?・・・?」

スバルは頭を傾げて考えた・・・・・

そして昼休みになり、スバルはゼオラと一夏、篠、ヤシリアと共に食堂に向かっていた。

「それにしても・・・一夏はさつきの人を知つてゐるの?」

「ああ・・・あいつは

「

「待つっていたわよーー一夏ーー」

と、一夏たちの前に鈴が出現した。

「鈴・・・。すまないけどソビしていくれないか？食券が取れないんだが」

「う、うるさいわね。分かつてるわよ」

と、文句言いながら鈴は道を開ける。

そして食事を持つてスバルたちは空いている席に座った。

「それで、一夏」

「ん？」

すると篝が一夏を睨みながら聞いてきた。

「その女とはどういう関係だ？」

「どういう関係って・・・ただの幼馴染だよ」

「幼馴染？」

「ああ、篝は知らなかつたな。篝は小四の終わりに引っ越しだろ？それで鈴が小五の頭に来て、中一ぐらいに鈴が引っ越したから、一年ぶりかな」

「・・・・・」

「鈴。こっちが前言つた鈴だ。ほり、小学校の時の幼馴染で俺が通つていた道場の娘だよ」

「ふーん・・・。そつか

と、鈴は鶴を見ると、鶴も鈴を見る。

「よろしくね

「ああ、じつじつや」

と、笑顔で挨拶していたが、なにやら火花を散らして、上に何か入るような気がした・・

「とこりで、一夏がクラスの代表になつたわけ?」

「いや・・・。俺じゃないんだ

「じゃあ誰よ

「え、ええと・・・。僕だけど」

と、スバルは少し引き気味になりながらも名乗り乗り出る。

「ふーん。あんたが・・・。それにしても一夏・・・『女』に負けるなんてなさけ

「

「僕・・・男なんだけど

「…………は？」

鈴は一夏のほうを向くと同時に瞬時にスバルを見る。

「あ、あんた……男なの！？」

「う、うん……間違われるのは慣れてるけど」

「じゃ、じゃあ、一人目の男って、あんたのこと……？」

「そうだけど……」

「……女っぽく見えるわねあんた……まあいいわ、クラスの代表同士……対抗戦のときはよろしくね」

「う、うん……」

「それと、あんた名前は？」

「……近衛スバル」

「スバルねえ……。さっきも言ったけど私の名前は凰鈴音……。鈴って呼んでもいいわよ」

「は、はあ……み、よろしくね……。鈴

「言つておくれけど……。私強いよ？」

「…………」

「そう言えばさ鈴。お前のクラスに男子が来たんだろ？」

「そうわね。。。もうさうそろ来ると思つたけど・・・」

と、鈴は後ろを向いて食堂の入り口を見る。

「あつ、来たわね」

すると、女子の大群に囲まれながらその男子が来た。

「あ、あの・・・もういいかな・・・」

そしてその男子は女子の大群から出てきて食堂に入る。

「え？」

するとスバルは驚いたかのよつに声を上げる。

「ん？」

そしてその男子もスバルを見て驚く。

スバルや一夏と同年代の男子で、少し茶色の髪をして、背丈は高い
ほつだらけ。

「・・・リュウセイ？」

「お前・・・もしかしてスバルか？」

そして一人はお互いの名前を確認した。

「久しぶり、リュウセイー！」

「久しぶりだな、スバル！」

と、お互いは再会を喜んだ・・・

「ところで、そのお方とお知り合いのですかスバルさん？」

と、セシリアが聞いてきた。

「うん・・・。リュウセイとは小学校の頃からの友達なの」

「ああ。俺の名前は伊達リュウセイっていうんだ。よろしくなみな
な」

「でも、中学の頃に僕が引っ越したから・・・。ちょうど三年ぶり
かな」

「そういえばそんくらいだな」

「へえ・・・」

「リュウセイ・・・隣いい？」

あると「ラトゥーー」が来た。

「おー、ラトゥーーか・・・。いいぜ」

と、リュウセイはラトゥーーを隣に座らせる。

「え？ あなたラトと知り合いなの？」

するとゼオラが驚いたように聞いてきた。

「ああ。俺のお袋がIISの操縦者なんだ。それでお袋は所属していた研究所によく俺を連れて行つてくれたんだ。そこにいたラトゥーーと仲がよくなつたんだ」

「そうなんだ。でもラトが他の人と仲良しになるなんて珍しいね」

「そ、そつかな？」

するといづかーーは顔が少し赤くなつた。

「そういえば、雪子さん今体調はどうなの？」

「今は安定してこるよ」

「そつか・・・よかつた」

「じつこじつじだ？」

一夏は疑問に思い聞いてきた

「俺のお袋……」一年前に病気に掛かつて、IISの操縦者を引退してから入退院を繰り返していたんだ…。今は病状も安定してきたんだ

「へえ…」

「あつ、やうだ。スバル」

「なに?」

「今日の放課後IISのテストに付き合つてくれないか?」

「IISの…?もしかしてリュウセイも

「ああ。」の学園に入る前に俺の専用機を貰つたんだ。スバルも持つているんだろう?」

「うん。 ただけど

「じゃあ、今日の放課後いいか?」

「…・ゴメン…。今日の放課後に僕のIISの開発責任者が来て説明を聞かないといけないんだ」

「そ、そつか…。じゃあまた今度頼むよ

「そのときは任せ

「じゃあラトゥーー。今日の放課後いいか?」

「え？」

「ラトゥーーは少し驚いたようだった。

「ほら、俺と知り合いの女子ってお前だけだからさ。それにHISには詳しいだろ」

「う、うん」

「だから頼むよ」

「・・・りゅ、リュウセイが言つなり・・・い・い・よ」

「そつか。ありがとうなラトゥーーーー。」

「・・・・・・・」

するとラトゥーーはさつきより顔が赤くなる。

そして放課後、スバルは待ち合わせとして会議室にいた。

そしてしばらく待つていると、山田先生が入ってきた。

「では、いひりです」

そして山田先生は一人の男性を会議室に入れた。

二十代後半ぐらいの男性で、青い髪を長くしており、軍人のような風貌だった。

「…………」

そしてその男性はスバルを見ると、そのままスバルの向かいの席に座る。

「はじめまして……。私は君のＩＳの開発責任者のイングラム・プリスケン少佐だ」

「しょ、少佐ですか……。僕は　」

「近衛スバル君……だね」

「は、はい」

「あまり時間が取れなくてな。説明は手短にさせてもらひつ」

「は、はあ」

「まずは、これを」

と、イングラムはデータ端末をスバルに渡す。

「これは？」

「それに君のＩＳ『ヒュックエバインＥＸ』のデータが入っている。言つておくがこれは極秘内容のものだ。ここに教員だとしても、君以外のものには誰にも見せるな」

「はい……あ、あの……」

「……なぜ君にそのＩＳを渡したのか？？？と、聞きたいのだらう」

「え？ は、はい」

「……ヒュックエバインＥＸは元々データ収集用のＩＳだった……。しかし元々の性能が高いこともあって、改修を加えて今の状態にした……。だがヒュックエバインＥＸを使いこなせる操縦者がいなかつた」

「……でも、どうして僕を操縦者に？」

「……後、『Ｔ－ＬＩＮＫシステム』のことについて説明しておぐ

イングラムはスバルの疑問を通り越して説明を続ける。

「Ｔ－ＬＩＮＫシステム？」

聞きなれない言葉にスバルは首をかしげる。

「君のＩＳに搭載されている念動力増幅装置のことだ」

「念動力？」

「超能力のようなものだ。君には強力な念動力がある」

「僕に・・・そんな力が?」

「今はもうT-EINEKシステムは起動している・・・。使い方はデータ端末を詳しく見てくれ」

「は、はあ・・・」

「・・・そのEISを・・・使いこなしてみる」

そういふと、イングラムは席を立ち、会議室を出た。

「・・・ヒュッケバイン・・・EX・・・」

スバルは左腕を上げて、待機状態であるキー ホルダーを見る。

「・・・一体・・・どんな秘密が?」

そしてスバルはデータ端末を開いてヒュッケバインEXのデータを見る・・・

そしてイングラムはEIS学園を出てから、学園のほうを振り向く。

「・・・フツ・・・。希望となるか・・・絶望になるか・・・お前次

第だ」

そう言い残して、イングラムは学園の前に止まつてあるコムジンに
乗り込んだ・・・

「Jリはエリ学園内の第五アリーナ……

「セヒト……」

スバルはアリーナ内でヒュッケバインDEXを展開していた。

今回は武装のテストとある」と試す」とである。

「……これかな……？」

スバルはエラのコンピューター内を探して、とあるシステムを表示した。

「……T-LINKシステム……」

スバルの目の前のモニターにはT-LINKシステムの稼動状態を表しているものであり、今の稼動状態は良好であった。

（確か念動力增幅装置だつて言つていたけど……とにかく試してみるかな）

と、イングラムから貰つたデータ端末に記された説明を思い出しながら、左サイドアーマーにある武器を手に取る。

今回新たに両腕のマウントに箱状のパーツを装着しており、内側には円形状のパーツが見えている。それは『チャクラムシューター』と呼ばれる有線式のチャクラムである。

両サイドアーマーには畳まれた状態でマウントされた武器があり、展開すると十字型の手裏剣になる『ファングスラッシュヤー』であり、それを右手に取ると、十字に展開する。

(・・・ファングスラッシュヤーに軌道のイメージを浮かべる・・・)

スバルはそのイメージを浮かべながら、ファングスラッシュヤーを投げた。

ファングスラッシュヤーはビームの刃を出して高速で回転しながら進んで行く。

「・・・・・」

スバルが思い浮かべたイメージに近い動きでファングスラッシュヤーは軌道を変えていき、仮想標的を次々に切り裂いていく。

「・・・・・」

しかし帰つてくる途中でファングスラッシュヤーの軌道がおかしくなり、そのままスバルに勢いよく向かってくる。

「うわわわわーー！」

スバルははとつさに避けさせようとするが、ファングスラッシュヤーはスバルの額辺りに直撃して、スバルは尻もちついて地面に座る。

「い、いてて・・・・

シールドエネルギーに守られていたとはいえ、衝撃は緩和できず、スバルは額を押さえながら立ち上がる。

「はあ・・・・。やつぱりいきなり使いこなせるわけないか

と、スバルは近くに突き刺さっていたファングスラッシュヤーを回収すると、元の状態に置むと左サイドアーマーに装着する。

「・・・でも、あんな感じでも、操れるんだ」

スバルは普通にイメージしただけだが、そのイメージを反映してファングスラッシュヤーは軌道を変えた。念動力を使用して武器操る・。それがT-LINEKシステムによる武装の操作だ。

「まあ、後は慣れていくしかないか

と、スバルは別のテストを行おうとすると・・・・

「おっ、スバルじゃねえか

と、後ろから呼ばれて、スバルを振り向くと、ISIスースに着替えたりユウセイがいた。

「リュウセイ」

「スバルもIRSを動かしていたのか？」

「うん。試したいところがあつたんだ」

「なるほど」

「リュウセイはなんでここに？」

「そりや、IRSを動かす以外何があるんだ？」

「・・・まあ、ないかな」

「だな。ちよつといや。ちよつと模擬戦に付き合つてくれるか？」

「模擬戦？」

「ああ。『R-1』の動きにも慣れないといけないからな。それに色々と試したこともあるからな」

「なるほど・・・。それなら僕も同じ事があるから・・・いよいよ」

「よし・・・。やつと決まれば」

と、リュウセイは右腕にあるRと模られたキー・ホルダーを持つ。

「行くぞ・・・R-1！」

そしてリュウセイの身体に光が纏つて、ISアーマーを身に纏う。

R-1の形状は、直角のラインもあれば、流形線なラインがあり、カラーリングは白をメインに赤や青、黄色など、トリコロールカラーである。耳にはISのデバイスが装着されており、背面にはスラスター兼のウイングが搭載されており、フロントアーマー、リアアーマー、サイドアーマーが腰に装着されていた。サイドアーマーにはリボルバー式の拳銃が装着されていた。

「それがリュウセイのIS……」

「ああ。さつきも言つたけど、R-1って言つんだ。でもスバルのISも中々かつこいいじゃないか」

「そりかな?リュウセイのもかつこいいよ」

「そうか……まあ話はここまでにして」

と、リュウセイはサイドアーマーからリボルバー式拳銃『Gリボルバー』を両手に持つ。

「遠慮はしないぜ、スバル!」

「僕もその気だよ」

と、スバルはマグナビームライフルとフォトンライフルを展開する。

それと同時に両者が一気に動き出し、最初にリュウセイがGリボルバーのトリガーを引いて弾丸を放つ。

スバルはそれを避けると、マグナビームライフルとフォトンライフルのトリガーを引いて、エネルギー弾を放つ。

リュウセイは左腕にシールドを展開して一発目を防ぐと、すぐさま横に行って一発目を避ける。

その直後にリュウセイは右手のGリボルバーをスバルに向けて弾丸を放つ。

スバルは弾丸を避けると、マグナビームライフルとフォトンライフルを収納して、M950マシンガンを両手に展開して、トリガーを引いてリュウセイに向けて放つ。

「くっ！」

リュウセイはシールドを前に出して無数に飛んでくる弾丸を防ぐ。

そしてリュウセイはシールドを地面に突き刺すと、そのまま横に移動しながらGリボルバーをサイドアーマーに装着すると、右手にブーステッドライフルを展開する。

「狙い撃つぜ！」

と、リュウセイはライフルのトリガーを引いて、弾丸を発射した。

高速で発射された弾丸はヒュッケバインEXの右肩に直撃する。

「くっ！」

衝撃が右肩から伝わり、一瞬バランスを崩す。

それを狙つて、リュウセイは次々と弾丸をスバルに向けて放つ。

「・・・・・」

しかしへバルは弾丸を避けようとはせず、右手のM950マシンガンを前に向けると、トリガーを二回一瞬で引くと同時に指を離して三発の弾丸を発射した。

そして放たれた弾丸はブーステッドライフルの弾丸に直撃すると、そのまま軌道を変えてスバルの横を通り過ぎる。

「す、すげえ。無理矢理軌道を変えたのかよ！？」

リュウセイはスバルの射撃の精密度に驚いていた。

「やつぱり面白いな・・・。なら！」

と、リュウセイはブーステッドライフルを収納すると、両拳をぶつけると構えた。

「・・・・・・・」

すると、リュウセイは集中し始めると、右拳に緑の光が纏いだす。

「・・・・？」の感じ・・・？」

スバルはなにか感じ取っていた。

「・・・・・行くぜっ！」

と、リュウセイは右拳に緑の光を纏わせたままスラスターを噴射させて、スバルに急接近した。

「必殺！・・・T-LENEKナツ「オツ！」

そしてスバルに拳を突き出してきた。

「つー！」

スバルはとつさに右手のM950マシンガンを収納して、同じようにして右拳を突き出して、両者の拳がぶつかる。

「くつー！」

ぶつかつた瞬間右腕に衝撃が伝わり、その痛みでスバルの顔が引きつるが、スバルは脚部後部装甲を展開して、背面スラスターと同時に噴射してリュウセイを押していく。

「な、なにつー！？」

そしてスバルは強引にリュウセイを弾き飛ばすと、右手に鋭く尖った杭がある武器を展開する。

「げつー！」

それを見てリュウセイの顔が青ざめる。

「手加減はしないよ」

と、そのままスバルはその武器をリュウセイに突きつけた。

「Gインパクトステーキ……いけえ！」

そしてGインパクトステーキをリュウセイの腹部に叩きつけると、トリガーを引いて衝撃を次々と叩き込む。

「ぐはっ！」

全部で六発叩き込まれて、リュウセイは後ろに大きく吹き飛ばされると、地面に叩きつけられた。

「うつ……いてて……」

リュウセイは腹を押さえながら立ち上がると、スバルが近くに着地した。

「大丈夫？」

「……本人がそう言つか？」

「……」

「でも、凄いな、スバルは」

「そりかな？」

「そりや、向かってくる弾丸を狙つて撃つて、軌道を変えているんだぜ？こんなスゴワザめつたにないぜ」

「・・・僕は普通にやっているんだけど・・・」

「いや、それはお前の感覚だろ・・・」

リュウセイは少し呆れていた・・・

「それで、リュウセイはこのへりでいいの?」

「ああ。R-1のことについて色々と分かつたからな。これからも模擬戦を頼むかもしれないから、そのときはよろしくな」

「うん。その時は任せで」

そうして一人は握手をすると・・・

「・・・・?」

スバルは何か違和感を感じた。

「どうした?」

「な、なんでもないよ」

スバルは今はいいと思って、気にしなかった・・・

「 」

スバルは寮の部屋に戻ると、さつきの違和感を思い出していた。

（さつきのはなんだつたんだろ？ . . . 何か頭に通り過ぎた感じだつたなあ ）

と、考えながら、スバルはカバンからヒュッケバインEXのデータが入ったデータ端末を取り出して、データを開く。

（クラス対抗戦まであと一週間 . . . それまでEXのT - LINEシステムを少しでも使いこなさないと ）

スバルは今後の計画を立てる

その頃

「それで、例の機体はどうなっているんだ」

「ええ。もうロールアウトしているわ。今は稼動テストを行つてゐるから、襲撃の時までには間に合つわ」

「やうか

と、どこかの暗い一室で誰かが話していた・・・

「しかし、プロトタイプで、しかも無人機で俺が求める性能を発揮できるのか」

「心配しなくともいいわ、アクセル。プロトタイプと言つても、完成型に近い性能よ。無人機とはいっても、あなたのモーションパターンをAIに取り入れていいわ。そしてデータを元にして色々と改善すれば、あなたが求める専用機の完成に繋がるわ」

「そうなればいいんだがな」

「・・・とにかくで、あなたのほうはどうなの、アクセル?」

「順調に進んでいる、これがな。既にW15がとある研究所のISの奪取に成功している。それとW13がイギリスで開発途中の試作ISのデータの奪取に成功している」

「そりゃ。そうなればスコールやヴィンテルも喜ぶでしょうね」

「あの一人の喜ぶ顔など、想像がつかんな」

「ふつ、言えているわね」

「どうあれ、俺はしばらく単独で動いているぞ」

「ぐれぐれも、無茶だけはしないでね、アクセル」

「分かっているさ・・・レモン」

そうしてアクセルと呼ばれる男性はその一室を出た・・・・

Story5 特殊能力（後書き）

今回何だかぐだぐだになつた気が・・・。

クラス対抗戦一週間前なので、E.S学園では少し盛り上がりを見せていた。

「……はあ

昼休みになつて、スバルはため息をついて購買所に向かっていた。

あれから念動力による武装の操作をやつしているのも、まだ完全にコツを掴めていなかつた。

（あと一週間……。それまで何とかしないと……）

と、考えていたうちに、購買所に到着した。

早めに来たので購買所は空いていた。

スバルはそこで焼きそばパンを購入して、近くの自販機でジュース

を購入した。

「・・・ん？」

そうして教室に戻ろうとすると、一人の生徒を見かけた。

生徒は何かを探しているのか、床をあちこち見ていた。

スバルは近付いていくと、床に鍵が落ちていた。

「これを探しているんだ」

と、スバルはジュース缶をポケットに入れて、鍵を拾い上げた。

「あの・・・

「・・・・・？」

スバルが呼びかけると、その生徒はゆっくりと振り向いた。

その生徒は少し紫が入った黒い髪で、腰の位置まで伸ばして根元で結んでいた。制服の左胸に付いているリボンの色からして、スバルと同じ一年だと分かった。背丈はスバルより少し低い。特徴的といえば、前髪が長く、目を覆い隠していた。

「探していたのって、これですか？」

と、スバルは鍵を生徒に差し出した。

「・・・はい」

と、生徒は手を差し伸べるが、なぜか手探りのようにして辺りに手を動かして、鍵に触れるとそれを持った。

「・・・ありがとう・・・ずっと・・探していたの」

「そりなんだ」

と、言つと、生徒が手を伸ばしてスバルの顔に触れてきた。

「・・え？・・な、何を・・？」

スバルはいきなりのこと驚いていた。

「・・・そこにあるのね・・」

目が前髪で隠れているのも、生徒はスバルの存在を確認したかのようだつた。

「・・え？」

一瞬何のことか分からなかつたが、すぐに理解した。

「君・・・もしかして・・目が・・？」

「・・うん・・・私・・目が見えないの」

「・・・・・」

「……でも……田が見えないけど……分かぬよ」

「……？」

「……なんとなく……あなたの顔が分かる……。女の子のような顔立ちなのね」

「……なんで分かつたの?田が見えないのに」

「……私にも分からぬ……でも、うつすらと、あなたの顔が思
い浮かぶの」

「……」

「あなたの名前は?」

「……近衛スバルだよ。一年一組の」

「近衛……スバル……。あなたが噂のI-Sを動かせる男子なのね」

「うん……。君は?」

「……向居鈴……。一年三組」

「へえ、三組の人なんだ」

「うん……。よろしくね、スバル君」

「よろしく……向居さん」

と、手を差し伸べた鈴の手をスバルが握った瞬間・・・

「・・・・・・・・!?

すると何かが頭を通り過ぎていった。

「・・・どうしたの?」

鈴は疑問に思つた声で聞いてきた。

「あ・・・・・なんでもないよ」

「ん?・・・?じゃあまたね、スバル君」

と言つて鈴はその場から離れていく。

「・・・・・今のつて・・・・

スバルはさつきの感覚を思つていた。

頭の中を何かが通り過ぎていった感覺だった。しかもその際一瞬に起きていたことは・・・・

「・・・・あれつて・・・・向居さんの・・・過去?」

一瞬だが、鈴の過去らしき光景が見えた。

(・・・でも、なんで?)

ちなみに書ひと、リュウセイの時も似たようなことが起きていたが、
今回のよつに光景が映つてはいなかつた。

「・・・それにしても・・・向原さん本当に田^たが見えないのに、
どうして普通に歩けるんだね?」

鈴^{すず}は特に恐る恐る慎重に歩いていたわけではなく、むしろ棒^{ぼう}を使つて前方を叩いていたわけではなかつた。

「・・・・・」

スバルは考えながら、教室に戻つていった・・・

「はあ・・・今日も疲れたなあ・・・」

と、リュウセイは伸びしながら寮の部屋に戻つていた。

そしてリュウセイの部屋がある廊下の角を曲がつたときだった・・・

「うわあつ！」

「きやつー！」

角を曲がった瞬間に誰かとぶつかり、床にしりもちつくと、何かが床に散乱した。

「す、すまねえ。大丈夫か？」

と、リュウセイは立ち上がるとぶつかった人を見た。

「い、いいのよ・・。私もちょっと前を見てなかつたから」

と、前にいたのは女子生徒で、立ち上がるとリュウセイに謝った。

女子生徒は少しきすんだ金髪をしており、それを背中の位置まで伸ばしており、左側には蝶を模した髪飾りがあった。瞳の色は水色と、外国人のように見える。身体のスタイルは結構よく、背丈はリュウセイとほぼ同じで、胸がやけに大きかった。

でもって、辺りに散らばっているのは、何かを「ペー」した紙と、本であった。

「・・・あれ？これって・・・」

と、リュウセイはその本を手に取つて見る。

「これって最近人気のゲームの攻略本じゃないか」

「え？ あんた知っているの？」

「ああ。俺もこれやつているんだけど、攻略本が出てるるのは初めて知つたな」

「へえ・・・」

と、女子生徒は何か掴んだかのように、リュウセイを見る。

「あんたって、ゲーム好き？」

「・・・ああ。俺ゲームが大好きなんだ。まあ今はテレビでやるのは持つてないけど、携帯ゲームのほうを主にやつているな」

「・・・なるほどね・・・」

「・・・こんな」とを聞いてるけど、君は？」

「大好きよ。ゲームがないと生きて行けないほどにね」

と、女子生徒は戸惑いに言つていた。

「あ、そこまで・・・。まあ、俺も似たほうかな」

「あなたも・・・。なんだか、気が合いそうね私たち」

「そうなのか？」

「どうも、他の女子はあまりゲームに興味がないのよね。話し相手がいなくて困つていなのよ」

「そ、うなんだ」

「だ、か、ら、よ、ろ、し、く、ね」

「あ、あ。俺の名前は伊達リュウセイって言つんだ。よろしくな」

「私は棚崎・星奈・。一年三組よ」

と、二人は手を握つて握手した。

「隣のクラスなんだ。俺は2組だ」

「へえ。・・・じゃアリュウセイ。ちょっとばかり私の部屋でゲームトークでもする?」

「あ、あ、い、い、ぜ。ゲームで話す相手ができるよかつたぜ」

「私、も、よ」

と、一人は一緒に歩き出した・・・・

その頃スバルは・・・・

「…………」

スバルはイスに座つていたの「」とを考えていた。

紐を解いた髪はさつ毛シャワーを浴びたばかりなので若干濡れていた。

（何なんだらう・・・あれって・・・）

と、考えるも、今考えてもどうしようもないとして、イスを立つと部屋の掃除を始めた。

布切れで机の上や棚の上を拭いて埃を取り、散らかっているものをまとめた。

「それにしても、ゼオラってなんでこんなに物を散らかすんだろう。
・・？」

そんな疑問を口ずさみながらも、部屋の掃除を終えた。

「ただいま」

と、ちよつといつぱりタイミングでゼオラが帰ってきた。

「お帰りゼオラ。それにしても今日せじうじて帰るのが遅くなつたの？」

「ちよつとね、色々とあつたのよ」

「ふーん」

「・・・それにも・・・相変わらず私が帰ってきたときにはいつ
も綺麗になつてゐるわね」

と、ゼオラは綺麗になつた部屋を見て言ひ・・・

「そりやあ、執事をやつていたときせいかして綺麗にしておかないと
つけなかつたんだよ」

「くえ・・・。置付いているんだ」

「まあね」

そうしてゼオラはカバンをベッドの横に置くと、ベッドに腰掛けた。

「・・・ねえ、ゼオラ」

「なに?」

スバルは少ししてゼオラに聞いてきた。

「・・・Jの学園つて、いろんな人がいるんだね」

「じつしたの?急にそんなことを聞くなんて」

「・・・なんとなくね・・・。ゼオラはじつ思つてゐるの?」

「そりや、私もそう思つてゐるわよ。だつて世界中からHISを学ぶために色んな人が来ているからね」

「……それって、障害を持つた人も、含まれるのかな」

「え？」

ゼオラは予想外なことを聞いて少し驚く。

そしてスバルは鈴のことを話した……

「……そう……。そんなことが」

「……」

「……でも、障害を持つた人も少しあるわよ。そんなに気にすることでもないわよ」

「……」

「……それより、ついに後一週間ね」

「え? あ、そ、そうだね」

スバルは少し驚いた様子で返事をした。

「でも、やっぱり少し不安かな」

「大丈夫よ。スバルなら勝てるよ、あつと」

「そう言われても・・・。それに対戦相手の鈴も中国の代表候補生。セシリ亞のようこじいかないよ」

「まあ確かにそうだけど、スバルはそれでも代表候補生のセシリ亞に勝てたじやない。今回も勝つ意気込みで行けば勝てるよ」

「・・・意気込みつて・・・それで勝てたら苦労はしないと想ひナビ」

「そ、そうよね」

「・・・でも、僕もそれなりのベストは须べますよ。クラスの代表になつたからには、期待に応えないと」

「それでいいのよ。そつやつて勝てるって思えば少しは違つてくるのよ」

「あ、そうかな?」

「そうよ。だから気を引き締めて」

「う、うん」

やつして話はもつ少し続いた・・・

「……おひ、結構手」わいな・・・

「でも、これで動きを止める」

と、リュウセイと星奈は部屋にてゲームをしていた。

星奈は部屋に一人であり、部屋にはテレビゲームがあつた。

ちなみになんのゲームかと言つと、今はやつの『一狩り行こうぜ』のあれ・・・

「よし、一・」

と、リュウセイはガツツポーズを取つた。

「何とか倒したわね・・・。それにしてもリュウセイは強いのね」

と、星奈は顔を上げてリュウセイを見る。

「まあな。でもこつま中々てこずつていたんだ。でもせつぱつ一
人だと違うな」

「やうね。一人より一人のほうがいいわね

と、楽しそうに話していた。

「・・・あひ。もつこんな時間か

と、リュウセイが時計を見ると、もう夜の十時半だった。

「時間が経つのは早いわね・・・」

「そうだな・・・じゃあ俺帰るな」

「そう・・・じゃあまた明日ね。それと、明日は別のゲームをしましょうね」

「ああ」

と、リュウセイは席を立つて、部屋を出た・・・

その頃・・・

「ところで、アクセルはまた単独行動か?」

「ええ。彼も何か調べたいことがあるのでしょうか」

と、どこの建物内の一室で男女一人が話をしていた。

「しかし、あんまり外をうろつかれては困る。まだ我々は表舞台に

立つ時ではない

「そうわね。でも、アクセルもその事を分かつてはいるわ。心配することはないわ、ヴィンデル」

「そうだといいんだがな・・・。ところで、例の機体はどうなった?..」

「もう戦闘に出せるようになつたわ。後は襲撃地点付近まで輸送するだけよ」

「そうか・・・」

「ところで、襲撃地点を聞いていなかつたわね。どこを襲撃させる気なの?..」

「ああ。あれのテストをするのには最適の場所だ。そう、その場所は

「

HS学園だ・・・。

Story 6 動き出す計画（後書き）

オリキキャラが多数登場とありますが、オリキャラの大半はどつかのアニメキャラがモデル（つていうか、そのまんま？）であります。まあ容姿のイメージや名前、設定などでどこのキャラクターをモデルにしているか分かりますね。

Story 7 クラス対抗戦

そしてクラス対抗戦当日・・・

「うわあ・・・結構来てる・・・」

スバルはピットのモニターで観客席を見ていた。

観客席は生徒でほとんど埋め尽くされており、溢れた生徒は別の場所のモニターで観戦するか、通路に立つてみている。

「・・・はあ・・・緊張するなあ・・・」

と、一息吐くと・・・

「じっかりしなさいよ、スバル！」

と、ゼオラから背中を叩かれた。

「痛つー！強すぎだよ、ゼオラー！」

「あ、」めさ。つこ・・・」

「・・・・・」

スバルは背中をさすりながら、ピットの出口のほうを見る。

「・・まあでも、さつきのは痛かつたけど、逆に気が晴れたよ。あ
りがとう」

「・・まあ、まあ、よかつたね」

スバルはうなずくと、ヒュッケバインEXを展開して、ピットの力
タパルトに足を固定した。

「つ！」

そして勢いよくカタパルトが走り出し、スバルはピットから飛び出
した・・・・・

そしてアリーナの中央に行くと、既に鈴が待っていた。
「来たようね、スバル」

「・・鈴」

「言つておくれけど、私は最初っから手加減はしないよ?」

「・・・僕もそのつもりだよ」

「ふん、言つてくれるじゃない・・・なりー。」

と、鈴は右手に青龍刀を展開して一気に接近した。

「くつー。」

スバルはとつさに左手にコールドメタルナイフを展開して斬撃を止めた。

その直後に反動で後ろに下がって距離を置く。

「やるじゃない。初撃を防ぐなんて・・・でも」

そして鈴は左手にも同じ青龍刀を展開して更にスバルに接近した。

スバルはとつさに後ろに下がり、マグナビームライフルとフォトンライフルを展開して、両方のトリガーを引いてエネルギー弾を放つ。

「そんなものー。」

しかし鈴はかわしながら、青龍刀を振るつて弾丸を弾いていき、青龍刀を柄頭同士に連結させた。

「くつー。」

スバルは武器を収納するとつさにM95のマシンガンを両手に展

開して、トリガーを引いて弾丸を放つ。

「ふんっー。」

すると、鈴は双天牙円をバトンのように回転させて弾丸を弾いた。

そして両肩の浮遊ユニットの円形のパートを展開すると、何かをした。

「ー。」

スバルは何かを感じてとっさに回避をしようとしたが、何かが右肩を直撃した。

「ぐつー！」

右肩に衝撃が走って少し痛みが出たが、すぐに体勢を立て直したが・

「今のは牽制だからね」

と、鈴は不敵の笑みを浮かべると、両肩の砲口から衝撃を放った。

「つーー？」

そして衝撃によってスバルは強く弾き飛ばされ、地面に叩きつけられた。

「なつ・・・あれつて・・・」

「・・・衝撃砲」

ゼオラはラトカーニと共にピットのモニターから戦いを見ていた。

「衝撃砲？」

「圧縮した衝撃を弾丸として放つ武装・。第三世代型に搭載されている新規武装」

「衝撃を・・・だから弾丸が見えないんだ・・」

「それに・・・あの衝撃砲には砲身がないから、制限無しでどんな角度からでも弾丸を放つことができる」

「つまり・・死角がない・・・」

「・・・そういうことになる」

「・・・スバル」

「・・・うつ・・・うつ・・・」

スバルは頭を振って、少しふらつくが立ち上がる。

「ふつ・・・」

鈴はそのままスバルに狙いを定めて衝撃砲を放つ。

「！」

スバルはとっさに地面を蹴つて前に飛ぶと、両脚部後部の装甲を開してスラスターを噴射させて一気に上空に飛び上がる。

鈴は次々と衝撃を連射してスバルを追い詰める。

「やるじゃない・・。この龍砲は砲身も弾丸も見えないのが特徴な
の！」

そして双天牙月を回して、スバルに向かっていく。

「つー！」

スバルはとっさに後退すると、M950マシンガンを収納すると、両サイドアーマーに装着しているファングスラッシュジャーに手を掛けた。

（まだ完全とはいかないけど・・・やってみるしかない！）

と、ファングスラッシュジャーを両手に持つて、十字に展開した。

「ファングスラッシュジャー・・・いけえつ！」

そしてスバルは勢いよくファングスラッシュジャーを放った。

「そんなもの！」

ビームの刃を展開したファングスラッシュナーは鈴に向かっていくが、
鈴はそのまま双天牙月を振るつてファングスラッシュナーを弾き飛ば
した。

「・・・・・」

そしてスバルはファングスラッシュナーに強く念じた。

「へいえつ！」

その直後、鈴が勢いよく向かってきた。

「つー？」

だがその瞬間、鈴の両側面から弾き飛ばされたファングスラッシュナーが飛んできて鈴を切り裂いた。

「いけるー！」

そしてスバルは更に念じると、ファングスラッシュナーは更に迂回し
て鈴を切り裂いた。

「な、なによ！？その武器の動きはー？」

鈴は驚いているうちに、スバルは戻ってくるファングスラッシュナーをキヤッチした。

「やつた・・・。」れなら・・・」

スバルはファングスラッシュャーを片方を左腰に戻すと、もう片方を思いつきり放った。

「くつ！」

鈴^{りん}は衝撃砲を放つが、ファングスラッシュャーは通常ではありえない動きをして衝撃をかわしていく。

「つー？」

「もう同じ手は通じないよ！」

そしてスバルは更に念じて、ファングスラッシュャーは鈴^{りん}のエスの左方の浮遊ユニットの外面を削つた。

「や、やったわね！」

ファングスラッシュャーは大きく迂回してスバルの手元に戻つた。

「凄い・・・これが念動力でなせる業・・・」

スバルはファングスラッシュャーを左腰に戻すと、鈴^{りん}を見る

「IJのまま・・行くよー。」

と、スバルはマグナビームライフルとM950マシンガンを展開すると、脚部後部装甲を展開して一気に鈴^{りん}に接近した・・・

だがその瞬間・・・

ドカアアアアアン・・・!

突然遮断シールドがビームよって破壊されてアリーナ中央に直撃して爆発した。

「な、なに！？」

「これは！？」

スバルと鈴は一瞬何か分からなかつたが、すぐに警報が鳴り響いた。

『試合中止！近衛！凰！直ちに退避しろ！』

と、織斑先生のアナウンスが流れ、それからしてアリーナの観客席のシャッターが降りていった。

「・・・スバル・・君」

観客席にいた鈴は何かを感じたのか、シャッターが下りるまでスバ

ルの姿を見た・・・

「い、一体・・なにが?」

『スバル! 試合は中止よ。ピットに戻つて!』

とつさに鈴からの通信が入る。

「戻つてつて・・鈴はどうするの?」

『私が時間を稼ぐから、その間に戻るのよ!』

「戻るつて・・・女の子一人を残して逃げるわけには・・・」

『ばか! あんたに何ができるつづつつよ!』

「・・・・・」

『私だつて最後までやりあつつもりは無いわよ。この非常事態・・・
すぐに先生たちが来て收拾して』

すると中央に漂つ爆煙からビームが飛んできた。

「鈴!」

スバルはとつさにスラスターを一気に噴射させて間一髪で鈴を抱えてビームから回避した。

「くつ！」

その直後次々とビームが飛んできてスバルはとっさに回避していくた。

「・・・大丈夫？」

「・・・あ、う、うん」

鈴は戸惑いながらもスバルに礼を言つ。

「・・・これが・・・？」

そしてスバルは鈴を離しながら晴れていく爆煙から現れる襲撃者を見て少し驚く。

全体黒い装甲に覆われた『全身装甲』で、両腕には太いチューブのものが複数あり、腕が太く、そこに大口径のビーム砲を内蔵していた。そして頭にある不規則に並ぶ赤いカメラアイが発光して、スバルたちを捉える。

「これでも・・・ISなの？」

「そうみたいね・・・信じたくないけど・・・『PS』じゃなさそうね」

と、スバルと鈴は身構えた。

『近衛君！凰さん！すぐに離脱してください！教師部隊がすぐにそ

ひに向かいますか、ひー。』

すると慌てた様子で山田先生から通信が入る。

「・・・いいえ。ここのでの工事を止めします。生徒たちの逃げる時間を稼がないと」

『ええ！？』しかし

』

すると、ノイズが走って、通信が途切れた。

「・・・妨害電波？」

「どうやらあいつから発せられてこるみたいね。・・・

と、鈴は黒い工事指した。

「鈴・・・やれるね？」

「当たり前でしょ。これでも代表候補生よ。」

「・・・分かった。じゃあ行くよ。」

と、スバルと鈴は一気に飛び出して、黒い工事に向かって行った。

「近衛君！？鳳さん！？応答してくださいー。」

と、凄く慌てて山田先生は一人の安否を確認しようとする。

「無駄だ。通信を妨害する電波が流れている。通信は行えない」

「そ、それでは！？」

「心配するな・・・。やつらならやれるわ・・・。だが・・・」

と、織斑先生は田の前のモニターを見て少し悩む。

遮断シールドの警戒レベルが4に設定されていた。外部からのコントロールによつてこのよつた事態になつており、観客席にいた生徒は足止めをくらつていた。

「・・・それより・・・全員集まつているな」

と、織斑先生は振り向くと、そこには一夏、セシリ亞、ゼオラ、ラトゥー、リュウセイがいた。

「今三年の精鋭が行つているシステムクラックが終了次第、お前たちはすぐにアリーナに突入しろ。そして今戦つている一人の援護を行つてもうら」

と、それぞれ理解してうなづく。

(・・・スバル)

ゼオラはモニターに映るスバルの姿を見る。

スバルはマグナビームライフルのトリガーを引くとエネルギー弾を放つが、黒いIISは見かけによらず素早い動きで避けると、左腕を向けてビームを放つ。

その直後に鈴^{りん}が衝撃砲を連射して弾丸を放つが、黒いIISはそれも素早く回避して、両肩の砲口から拡散したビームを放つた。

「ぐつ！」

スバルは拡散ビームを避けると、マグナビームライフルとM950マシンガンのトリガーを同時に引いて弾丸を放つ。

黒いIISはその攻撃を避けるが・・・

「もらつた！」

その瞬間に鈴^{りん}が一気に接近して双天牙刃を振るつが、黒いIISはそれを素早く回避した。

「ぐそつ！後一步だつていうのに！」

そして黒いIISは両腕^{りん}を鈴^{りん}に向けると、ビームを放ち、鈴はとっさに回避する。

「ぐつ・・・。このままじゃ・・・」

スバルはM950マシンガンを放ち続けるが、しばらくすると銃身下部から排出される空薬莢が出なくなり、更に鈍い音がした。

「弾切れ……くつ」

スバルはとつたにM950マシンガンを収納するとマグナビームライフルを黒いIISに向けてトリガーを引く。

ガキンッ！

「！？・・・これも弾切れ！？」

スバルは黒いIISから放たれるビームを避けながら、マグナビームライフルを収納して、右手にM950マシンガン、左手にフォトンライフルを展開して黒いIISに向けてトリガーを引く。

同時に鈴^{りん}が衝撃砲を放つが、黒いIISはそれらを避けていくが、マシンガンの弾一発が直撃するがダメージの内には入らないだろ。

「どうするのよ、スバル！」のまま攻撃をしたつてあいつに勝てないわよ！」

「・・・それはそうだけど・・・何か手は・・・」

と、スバルは黒いIISの動きを見て、何かに気付いた。

「・・ねえ鈴^{りん}・・・あのIISって・・・何かおかしくない？」

「何がおかしいって言つのよ？」

「・・・なんて言つたか・・・あれつて・・本当に人が乗つているのかな?」

「はあ? I Sは人が乗らない動かな・・・つー」

鈴^{りん}はスバルの言葉で何かに勘付く。

「・・・そういうえば、さつきから私たちが話していると攻撃してこないわね・・・まるで興味があるみたいに」

「・・・うん」

「・・・でも、それはただ単に相手が私たちの話に興味を持つていてからじゃないの? I Sは人が乗つていないと動かないもの・・」

「・・・でも、あれから人の気配を感じないんだ」

「人の気配?」

「うん」

「そんなの、何で分かるのよ」

「・・・僕には分かる」

「はあ・・・なんなのよそれ・・・」

鈴^{りん}はため息を吐いて呆れた。

「もし、あれが無人機なら、一定のパターンがあるかも」

「パターン？」

「さつきから僕たちは交互に攻撃しても、相手はそれに動じず的確に回避していった。でもその回避する際の動きのパターンがあるかも」

「・・・パターンがあるかないか知らないけど、そもそもあいつが無人機だつて言つ証拠はどこにあるのよ？」

「・・・動きだよ」

「動き？」

「動きは柔軟だけど、一定の動きを狂いもなくやっているところがある。いくらなんでも正確に同じ動きを人間が行えるわけがない」

「・・・確かに、そうだけど・・・だからってどうなのよ？」

「そのパターンを読み取れば、必ず倒せるよ」

「はあ・・・言い切ったわね。じゃあ、あんたのその策に乗つてやろうじゃない。私があいつに攻撃を掛けるから、その間にそのパターンを読みなさい」

と、鈴は双天牙月を回すと、黒いIISに一気に向かつて行つた。

(・・・フォトンライフルの残弾数は後5発・・・M950マシンガンは後25発・・・後はあいつの動き・・・それが勝負の鍵・・・)

スバルは武器の残弾数を確認すると、黒いＩＳの動きを見る。

鈴は双天牙月を振るうが、黒いＩＳは素早く避けると右腕を突き出してきたが鈴はとっさに回避すると衝撃砲を放つ。

だが、黒いＩＳはとっさに避けたが、片方の衝撃砲の放った弾丸が黒いＩＳの左腕に直撃した。

スバルはそれを狙い、フォトンライフルを放つた。

しかし黒いＩＳは右腕を突き出すとビームを放ち、ライフルの弾丸を打ち消した。

「くっ・・・！」

しかしスバルは何かを掴んだのか、フォトンライフルを一発とＭ９５０マシンガンを全て放つた。

黒いＩＳがそれを避けると、その後に鈴が衝撃砲を放つた。

「・・・やつぱり・・・これが」

そしてスバルは黒いＩＳの動きに気付き、フォトンライフルを構えた。

「・・・そこだつ！」

そしてスバルトリガーを引き、黒いＩＳがいないほうに向けて弾丸を放つた。

すると、黒いEISはその弾丸が向かっていくほうに入つていった。

そして黒いEISはそれに気付くがもう遅く、弾丸は黒いEISの左腕の間接に直撃して、左腕を吹き飛ばした。

「もらつた！」

と、鈴^{りん}が最大出力で衝撃砲を放とうとするが、スバルはフォトンライフルを放つた。

そして鈴^{りん}が衝撃砲を放つと、フォトンライフルの弾丸と同時に黒いEISの胴体に直撃した。

「マルチトレースミサイル……一斉発射！」

と、スバルは背面のマルチトレースミサイルのコンテナを展開してミサイルを一斉に発射した。

そして完全に動きが鈍つた黒いEISはミサイルを全て直撃し、そのまま動きを止めて、赤いカメラアイが消えると、前のめりに倒れた。

「はあ……はあ……はあ……なんとか……やつたね、鈴^{りん}」

スバルは鈴^{りん}に寄ると、辺りを見回す。

「それにしても……やつぱりあなたの言つ通りね

と、鈴^{りん}の視線の先には、機械の部品が露出した黒いEISがあつた。

「それにしても、なんであれに人が乗つていなつて事がわかつた

の
?」

「……それは……なんていうか……やつぱり気配かな?」

「・・・はあ・・その気配が分からぬでしょ。つが・・・。まあ、どうあえず倒したからいつか」

と、
鈴は伸びりんした。

「・・・とりあえず、みんなの元に行こい！」

と、歩き出した・・・・・その瞬間・・・・

バリイイイイイイイイイン・・・・！！

「！」

すると、遮断シールドが更に割れて、そこから新たに侵入して来た者がいた。

そしてそのものはアリーナの中央に着地すると、スバルと鈴を見る。^{りん}

それは全身紺色のカラーリングをした『全身装甲』をしたISで、マッシュブルな姿をしており、顔には白いひげのようなパーソンがあり、

両肘には鋭いブレードが付けられていた。

「ハ、これは・・・」

「まだ来るの！？」

『・・・・・』

すると、蒼い機体の赤いツインアイが発光すると、両手を開いて前に出した。

「つー」

そして手のひらにあるクリスタルからエネルギー弾が連続で発射され、スバルと鈴を襲つた・・・

そして蒼い機体がエネルギー弾を放つて、砂煙が上がり、それが晴れると・・・

「・・・くつ・・・・」

「・・・・・」

すると、スバルは何かのフィールドを前に出した左手から出して、エネルギー弾を防いでいた。

「り、鈴・・・大丈夫？」

「・・・だ、大丈夫だけど・・・あんた一体何を・・・」

「・・・ちょっと自信はなかつたけど・・・何とかできた・・・けど」

するとスバルはその場に膝を着いた。

「ちょ、大丈夫なの！？」

「・・・ぼ、僕は・・大丈夫・・・（や、やつぱり・・・少し無理が

あつたかも・・・」

スバルの息は何もしていないのに荒れていた。

スバルはまだ使いこなしていないが、念動力を用いて作り出すフレードを作動させたが、使いこなしていない今では攻撃を防げるが、念動力を大幅に消費する結果にしかならない。つまり念動力を消耗することは、念動力を消耗することに繋がる・・・

「・・それに・・」

息と整えると、スバルは立ち上がって、前を見る。

そこには両手を下ろしてスバルと鈴を見る蒼い機体がいた。

「何なのよ・・・あいつは」

「分からないよ・・・。少なくともさつきのやつの仲間ってわけじやなさそう」

「何でそんなことが分かるのよ?」

「もしあいつが増援としてきたのなら、何で味方の機体を踏んづけて着地する必要があるの」

「・・・確かに」

蒼い機体の足元には、さつき撃破した黒いISの残骸があり、蒼い機体はちょうど黒いISを踏んづけて着地していた。

「でも、それだったら証拠隠滅って考え方もあるわよ」

「それなら、あんなに大雑把にやるわけがない。本当に証拠隠滅を図りうとするのなら、確実に黒いE.Uを破壊するはず。でもあいつはそれを行っていない」

「…………」

そして蒼いE.Uは構えると臨戦態勢を取る。

「向こうはやはり気満々ね」

「そのようだね……残りのエネルギーは？」

「後もう少し戦えるって所ね。龍砲も後数発放てるぐらい。あんたはどうなのよ？」

「……まだ武器はあるけど、いつもエネルギーが少ない」

「……全く……。明らかにこっちが不利な状況ね」

「……でも、もつもつと一夏たちが来てくれるよ。それまで僕たちで食い止めるよ」

「簡単に言つわね。結構悪い賭けになると悪いけど」

「……分の悪い賭けは嫌いじゃないよ」

「はあ……全く。まあ、やつてやるじゃないの」

と、鈴は双天牙月を回して、スバルはフォトン・ライフルSを展開して、蒼いISに向かっていく。

蒼いISは赤いツインアイを発光させると、一人に向かっていく。

そして肘のブレードを展開すると、スバルに切りかかってきた。

スバルはとっさに後ろに下がって攻撃を回避すると、フォトン・ライフルSのトリガーを引いて弾丸を放つ。

すると蒼いISは地面を蹴つて弾丸を回避した。

「でりやああああーー！」

その直後に鈴が飛び込んできて、双天牙月を振り下ろした。

『』

すると蒼いISはそのまま肘のブレードで受け止めた。

「くつー！」

「鈴！」

スバルはすぐにフォトン・ライフルSのエネルギー弾を放つが、蒼いISは鈴を弾き飛ばすとそのまま横に動いて弾を避ける。

「見かけによらず素早い！」

スバルはトリガーを引き続けて蒼いISにエネルギー弾を放つてい

く。

『

』

すると蒼いＥＳは避けながらスバルのほうに向かってきた。

「くつー！」

スバルはとつさに後ろに下がりながらフォトン・ライフルＳを放つていて、蒼いＥＳは放ったエネルギー弾を手で弾いて一気にスバルの目の前まで接近した。

「つー！」

そして蒼いＥＳが左肘のブレードを振り上げるが、スバルはとつさに回避したが、フォトン・ライフルＳが切り裂かれてしまった。

「ちつー！」

スバルがとつさにフォトン・ライフルＳを捨てるとき爆発し、その後に左サイドアーマーからファンクスラッシュジャーを取り出して展開して蒼いＥＳの肘ブレードを受け止めた。

そしてスバルは右脚部後部の装甲を展開して、スラスターを噴射させて蒼いＥＳを蹴り飛ばす。

「チャクラム・・・ゴーー！」

スバルは左腕に装着されているコンテナを開くと、そこから円形のパーツを発射して、その瞬間に円形パーツから複数の刃が展開した。

チャクラムが飛ばされて、スバルは後ろに繫がれているワイヤーで操つて、蒼いＥＳに切りかかる。

蒼いＥＳはそれを避けていくが、数回胴体にチャクラムが直撃して、動きが鈍る。

「どうやあああつ！」

その瞬間に鈴が飛び出し、双天牙月を振るう。

しかし蒼いＥＳはスラスターを噴射して斬撃をかわした。

「つー？」

そして蒼いＥＳが右肘のブレードを鈴に振るうてきた。

『』

しかしその腕をワイヤーが絡み付いて、動きを封じられた。

その後ろではワイヤーを張るスバルの姿があつた。

「鈴、今のうちに！」

「わ、分かつてるー！」

と、鈴ははとっさに下がると、衝撃砲を一回放つ。

ワイヤーに繫がれて動けない蒼いＥＳはそのまま衝撃砲の弾丸を左

肩に受けた。

『

』

すると蒼いEISはワイヤーに絡まれた右腕をそのまま強引に前にやつた。

「う、うわあつ！？」

そしてスバルはそれによつて前に飛ばされて、地面に叩きつけられた。

「ぐつ・・・！」

地面に背中を強く叩きつけられて、一瞬息が詰まる。

すると蒼いEISは左手を開いて前に出すと、手のひらのクリスタルからエネルギー弾を放ってきた。

「や、やばい！」

スバルはとつさにスラスターを噴射させて上に上るとエネルギー弾を回避しながら、蒼いEISの右腕に絡み付いているワイヤーを外した。

（なんて馬鹿力・・・これじゃまともに力比べに入つたら逆にやられる）

スバルはチャクラムを左腕のコンテナに収納すると、右サイドマークからもう一つファンクスラッシュジャーを取り出した。

「ファングスラッシュジャー……いけえつ！」

そして思いつきりファングスラッシュジャーを投擲して、高速で回転しながら蒼いISに向かっていく。

蒼いISは両手を開いて手のひらのクリスタルからエネルギー弾を連続で放っていく。

「つ！」

スバルは念じてファングスラッシュジャーの軌道を変えてエネルギー弾を回避していき、蒼いISの胴体を切り裂く。

「まだいくよ！」

と、ファングスラッシュジャーを迂回させて更に蒼いISに攻撃を加えた。

「・・・つ・・・！」

すると突然激痛が襲つてスバルは視線を逸らしてしまい、ファングスラッシュジャーはそのままアリーナの隅に行ってしまい、地面に突き刺さつた。

『』

そして蒼いISは地面を蹴つてスバルに向かっていくと、右拳を突き出した。

「……」

スバルは回避が遅れて、攻撃をくらってしまい、アリーナの壁に叩きつけられた。

「ぐつー！」

それに続き、蒼いエスは更に追撃をかけようとした。

『』

しかし後方から攻撃を受けて、前に数歩動いた。

後ろには衝撃砲を展開した鈴の姿があった。

「早く逃げなさいよー！」

そして双天牙月を回して蒼いエスに向かっていく。

『』

すると、蒼いエスは両手にエネルギーを溜めて、鈴に一気に接近した。

「はあああああー！」

鈴が双天牙月を振り下ろすと、蒼いエスは右の拳を振り上げて双天牙月を弾き飛ばした。

「なつー？」

そして蒼いEISは両手を開いて重ねると、鈴の近くにやり、至近距離でエネルギー弾を放った。

「ぐつーー？」

それによつて鈴は大きく吹き飛ばされて、アリーナの壁に叩きつけられた。

『』

蒼いEISが振り向くと、スバルが背中のミサイルコンテナを展開して、ミサイルを発射した。

そしてミサイルは蒼いEISに全て直撃して、爆発した。

「！」、これで……どうへ、

しかし、爆煙が晴れると、ほぼ無傷の蒼いEISの姿があつた。

「……そ、そんな……ー？」

スバルが驚いているうちに、蒼いEISはゆっくりと接近してきた。

「……つー？」

すると、突然激しい頭痛が襲ってきて、スバルは頭を押さえた。

「あ、頭が……ぐう……！」

敵が接近しているが、スバルにはビビリしようもできなかつた……

「「「う・・・・・・」」

そうして頭痛が少し続いていつて、スバルは押さえた手を下ろした。そしてスバルは前を向いて、目を開けると、その瞳には光が宿つていなかつた……

「「「ぞ・・みんな！」」

そして一夏たちは扉がよつやく開いて、アリーナ内に入った。

「な、何だよこれ！？」

アリーナ内では、スバルと蒼いエスが戦つていた。

スバルはコールドメタルナイフを持って蒼いエスに的確に攻撃を当てていた。

「・・・・・！鈴！」

一夏はアリーナの壁に座つてうなだれていた鈴の姿を見つけてとつさに傍こよる。

「鈴！・・しつかりしろ！」

一夏は鈴を揺ゆかして声を掛ける。

「・・・大丈夫・・気を失つてはいるだけ・・・」

するといづかーーが近くによつて鈴の様子を見る。

「や、そつか・・・よかつた・・・。それより、スバルは」

と、振り向いて見ると・・・

「なつ！？」

すると、スバルは蒼いＩＳの顔面の高さまで飛び上がると、右脚部後部装甲を開いてスラスターを噴射し、思いつきり蒼いＩＳの頭に回し蹴りを入れた。

『』

蒼いＩＳは直後に右腕を勢いよく突き出した。

「・・・・・」

するとスバルはそれを回避して、右サイドアーマーの裏から棒のようなものを取り出すと右手に持つて先端からビームの刃を展開して蒼いＩＳの右腕関節を切断した。

その後に左脚部後部装甲を開いて、スラスターを噴射して蒼いＩＳの横腹に回し蹴りを入れた。

それによって蒼いISの体勢は崩れて、スバルはそのまま蒼いISの顔面を掴むと強引に押して地面に叩きつけ、そのまま地面を突き進んでいった。

「・・・スバルなのか・・・あれ・・・?」

リュウウセイはあまりの衝動に言葉を失った。

スバルは蒼いISの胸部を踏みつけると、右手に『M13ショットガン』を展開して、銃口を顔面に突きつけ、トリガーを引いて至近距離で弾丸を放っていく。

それによって蒼いISの顔半分が破壊されて、蒼いISは左腕を突き出してスバルに攻撃を掛ける。

「・・・・・・」

しかしスバルは蒼いISの左腕を右足で手の部分を蹴つて軌道を変えると、M13ショットガンを左腕関節に突きつけるとトリガーを引いてゼロ零距離発砲して関節を吹き飛ばした。

「・・・・・・」

するとスバルはM13ショットガンを収納して、シシオウブレードを展開して、鞘から剣を引き抜くと鞘を後ろに投げ捨てた。

蒼いISは立ち上がりとするが、スバルは腹部を踏みつけてそれを妨害し、シシオウブレードの刀身先端を下に向けると、そのまま蒼いISの胸部に突き刺した。

蒼いエスが震えだと、スバルは更に刀身を刺し深めていき、強引に上や下、斜めに切り進んでいく。

そしてしばりく震えると、蒼いエスのツインアイの光が消えて、動きを止めた。

「…………」

ゼオラその戦いを見てただ呆然と立ち尽くしていた。

それは近くにいる一夏、リュウセイ、ラトゥー、セシリ亞も同じだった。

「…………な、何なんだよ…………。あれがスバルだって言うのか…………！」

「…………あまりにも違う…………。スバルがあなことをするはずがない…………」

「…………」

「…………信じられませんわ…………」

そしてスバルはシンオウブレードを引き抜くと、そのまま立すべくした。

「…………スバル」

ゼオラはスバルの近くに寄りついた……その瞬間だった……

突然外から破壊された遮断シールドの隙間を通りてエネルギー弾が降り注いできた。

「つ……」

ゼオラたちはとつさに回避したが、スバルはそのエネルギー弾の直撃を受けて後ろに倒れた。

「スバル！」

「・・・ゼオラ・・上！」

ゼオラはラトウーニの言つ上を見ると、遮断シールドの隙間から三機の影が侵入してアリーナ中央に着地した。

「！」
「こつらは・・・」

そしてその三機は辺りを見回した。

三機とも形状はほぼ同じだが、中央にいる機体は白をメインにして、水色のカラーリングで、『全身装甲』をしており、頭はツインアイをして、頭頂部に後部に伸びるアンテナがあり、頬の部分に牙のよ

うな形があった。両肩には六枚の羽根のようなパー^ツがあり、右手にはパー^ツが中央に開いたライフルを持っていた。

他の一機は水色が緑になつており、ツインアイではなくゴーグルであり、両肩の羽がなく別のパー^ツがあつた。

「・・・ふん・・・『アークゲイン』も所詮その程度か・・・

と、青いPSを装着しているアクセルは機能を停止しているアークゲインを見る。

「・・・こいつか」

アクセルは氣を失つているスバルを見る。

普通なら氣を失つたらISは解除されるはずだが、まだヒュッケベインEXは解除されていなかつた。

「・・・まさか・・・あの『赤き凶鳥』が現存していたとは

しかしアクセルはすぐに興味を別のものに移した。

「・・・ほう。あれが噂のISを操る男・・・織斑一夏か

「・・・IJの反応・・・PS?」

「え・・?PSだと?」

「P.S.って・・確かにP.S.の技術を応用した・・・擬似I.S.・・・」

「・・ちょっと待つてくれ。P.S.ってまだ量産には至っていないはずだぞー!?」

「・・確かにP.S.はまだ量産には

とセシリアが言おうとした瞬間、三機のP.S.はライフルを向けるとエネルギー弾を放つてきた。

「へーーーあいつらも敵かよ

「そのようだな

「あのI.S.を回収しに来たつて事ね

「・・・たぶん・・・そう

「ならば、やることはないついですわ!」

と、セシリアは手にしていたスター・ライトMK-?-?を構えるとP.S.三体に向けてエネルギー弾を放つた。

「アト、行くわよー!」

「うん

ゼオラはオクスタンライフルを構えると、アトウーーーと共に縁のP.S.一体に向かっていく。

「スバルは任せろー！」

と、リュウセイは倒れているスバルに向かっていき、セシリアはもう一体の緑のPSに向かっていく。

「うー！」

すると青いPSがライフルを後ろ腰に装着して棒のようなものを取り出すとビームの刃を展開して、一夏に切りかかってきた。

「くつー！」

一夏は雪片状型を開いて白いビームの刃を出して、青いPSのビームの刃と交える。

「何者だ・・お前たちは」

「・・・織斑一夏」

「ーー？」

一夏は急に名前を呼ばれて驚くが、声の主が男性だと悟つたことも驚く。

「その実力・・見せてもらおつかー！」

と、アクセルは背面スラスターを噴射させて一夏を押していく。

「スバル！」

リュウセイはスバルの近くによつて様子を見る。

「・・・気を失つてゐるだけか・・・。でも

「

リュウセイはわかつまでのスバルを思い出す。

（・・本当に・・お前だつたのか・・あれば・・）

そう思いながらも、リュウセイはスバルを抱えてアリーナの隅まで行く。

「くつー！」

ゼオラはオクスタンライフルの上の銃口から実弾を発射するが、緑のPSは回避すると手にしている中割れのライフルからエネルギー弾を放つ。

ゼオラが回避すると、青いIISを身に纏つたラトゥーーが接近する。

全体のカラーリングは青でほとんど統一されており、各所に赤い所があり、両肩には横に伸びるアーマーが装着されており、左腕のアーマーには三本の棒があり、背中にはブースターがあり、その両サイドに一对の翼が搭載されていた。頭のデバイスは耳に後ろに伸びる耳のような突起である。

量産試作機の第一世代型「IS-1」・「ゲシュペンストMK-1」？ タイプ「S」である。

「ラトゥーー」は右手に持つ『メガ・ビームライフル』のトリガーを引いてビーム弾を放つが、縁のPSはそれも避けた。

「くつー！ なんて機動力なの・・・」

「PSにしては・・・」の性能って・・・

「つおおおおおおーー！」

一夏は雪片式型を振るつが、アクセルはビームサーベルで的確に防いでいく。

「ちつー！」

そして一夏は雪片式型を下から一気に振り上げた。

「ふん」

しかしアクセルは雪片式型を受け止めて、一夏に蹴りを入れる。

「所詮素人か・・・。期待外れだな」

「くつー。PSなのになんて力だよ・・・」

「機体の性能の違いが戦力の決定的差ではない・・・これがな！」

と、アクセルは一夏に膝蹴りを入れた。

「ぐう！？」

一 夏は後ろに飛ばされるが、何とか体勢を保つた。

「ソードブレイカー・・・・・いけえつ！」

すると両肩の羽パー^ツが展開して、ビ^ツトのよ^ウにして射出して夏に向かわせた。

「ハハ……セシコアのジグマのやうなものかー?」

一夏は向かってぐるソードブレイカーを雪片式型で切りかかるが、ソードブレイカーは攻撃をかわすと先端が中央から開いてそこからビーム弾を放ってきた。

一夏は雪片式型を振るいながらビーム弾をかわしていくが、数発が白式の装甲に直撃する。

「甘いな」

すると一夏の背後にソードブレイカー全基が配置された。

「しまつ！？」

一夏がどうさにかわそうとしたが、その前にソードブレイカーからビーム弾が発射され、背中にビーム弾が命中して爆発する。

「ぐああああーーー！」

そして一夏は衝撃で前に倒れてしまった。

「・・・機体には傷を付けはしない・・。だが、操縦者だけは死んで
もいひ。だが心配するな、一瞬で済む」

と、アクセルはビームサーベルを振り上げた。

「ぐつ・・・・ー！」

一夏は目を閉じた・・・

「・・・・・・？」

しかしこつまで経つてもビームサーベルは来ない。

一夏は恐る恐る目を開けると・・・

「つーー？」

すると前の前には、一体の白いHUGがアクセルの攻撃を防いでいた。

そして白いHUGがアクセルを受け止めているシールドを突き
出してアクセルを弾き飛ばす。

そのIISは『全身装甲』で、白をメインに胴体に青、赤、黄の三色が施され、トリコロールカラーであった。形状はスリムで普通であり、背中にはブースターが搭載されたバックパックが搭載され、その上部分に一本の白い棒が搭載されていた。右手にはビームライフル、左手にはアクセルの攻撃を防いだシールドがあり、赤と白のもので、表面下半分に黄色の十字の装飾が施されていた。頭の額辺りには中央に赤いパーソにV型の白いアンテナがあり、黄色のツインアイがあった。

「馬鹿な！？・・・『白い英雄』だと！？」

アクセルはその機体を見て驚いていた。

そして白い英雄と呼ばれるIISはアクセルを見ると、地面を蹴つて飛び出し、右手に持つビームライフルのトリガーを引いて、ビームを放つていく。

「くつ！」

アクセルはとっさに回避して、左手に腰に装着しているライフルを取り出して、銃身を展開してエネルギー弾を発射した。

白い英雄はシールドで防ぐと、更にビームライフルを放つ。

「なぜこいつが今頃出てきたんだ！？」

そしてアクセルはライフルを投げ飛ばすと、一気に接近する。

白い英雄はビームライフルを放つて撃ち抜き、爆発した。

その直後に煙から青いPSが飛び出してビームサーベルを振るつて
きた。

そしてビームサーベルは前に出した白い英雄のシールドを切り裂いた。

「な、なにつー!?」

しかしシールドの上半分が弾け飛ぶと、そこには白い英雄はいなかつた。

「つーしまつた！」

アクセルは上を見上げると、弾け飛んだシールドの影からビームライフルを後ろ腰にマウントして、バックパックにある一本の棒を引き抜き、ビームの刃を展開してアクセルの目の前に着地した。

「くつー！」

アクセルはとつさにソードブレイカーを展開したが、白い英雄はその瞬間に一本のビームサーベルを勢いよく横に振るい、ソードブレイカーを全て切り裂いた。

「ここまでやるとは……」

そしてアクセルはとつさにソードブレイカーをパージして、白い英雄から離れる。

「Wシリーズ・・・アークゲインを回収して撤退だ！」

アクセルが命令すると、他の一機が戦闘を中断して、倒れているアクゲインを抱えると、アクセルの元に向かう。

「……まあいい。データの収集はできた……それに予想外の収集もあった」

そしてアクセルはそのままアリーナを出て行った……

「……終わったのか」

「……そうみたいね」

そして一夏たちは一瞬に集まる。

「……しかし」

すると一夏は白い英雄を見る。

「一体……何者なんだ?」

「わからないわよ……でも、あんなエサがあるなんて聞いたことがない」

「……」

そして白い英雄は一夏たちのまつを向いて、しばらく見た。

「……」

そして白い英雄は地面に落ちて いる真つ二つになつたシールドを回収すると、そのままアリーナを飛び去つて いった・・・

「行つてしまつた・・・」

一夏たちは最後まで白い英雄の姿を見届けた・・・

Story8 白い英雄（後書き）

白い英雄は・・・まあ見たら大半が分かるでしょうね。

「・・・・う、うう・・・」

スバルはしばらくして、目が覚めた。

「・・・・」
「は？」

辺りを見回すと、保健室だと言つことが分かった。

(・・一体・・何が・・?)

そして半身を起こすと・・・

「・・氣が・・付いたんだね」

「・・?」

すると横から声がして、顔を向けると鈴の姿があつた。^{すず}

「向居さん・・・」

「・・体のほうは・・大丈夫なの?」

「うん・・・少し痛みがあるくらいだから

「・・・そう・・・よかつた」

と、鈴はスバルの手を取る。

「・・・・・」

「・・・スバル君・・苦しい思いを・・したの?」

「え?」

スバルは意外な事を訊かれて、少し驚く。

「・・・なんだか・・そんな気がするの・・」

「・・・それは・・」

「・・・ゴメンね・・・変なことを聞いて」

「あつ、いんだよ・・・向居さんが謝ることじやないから・・」

「・・・・・」

すると鈴は席を立つて保健室を出て行つた。

「・・・向居さん・・」

スバルはしばらく保健室のドアを見つめた・・・

「…………」

そしてスバルは身体を寝せて寝ていると、保健室のドアが開いた。

「…………？」

ドアのほうを見ると、ゼオラとリュウセイがいた。

「ゼオラ・・リュウセイ」

「スバル・・大丈夫なの？」

「うん・・・」

「よかつた・・・。全く心配掛けないでよ」

「「めん・・・」

「…………」

リュウセイは険しい表情でスバルを見ていた。

「・・・どうしたの、リュウセイ？」

「あつ、いや、なんでもない」

そしてリュウセイとゼオラはイスに座った。

「・・・ねえゼオラ

「なに?」

「・・・あの後・・・どうなったの?」

「あの後つて?」

「・・・黒いEISを倒した後だよ。次に現れた蒼いEISの辺りから

「スバル・・・お前何も覚えていないのか?」

「・・・途中まで覚えているよ・・・でもその後が覚えてないんだ

「・・・・・・」

「あの後どうなったの?」

「・・・蒼いEISは・・・お前が倒したよ

「え? ! 僕が?」

「俺も信じられないさ。だが、本当だ

「ええ。でも

「でも?」

「・・・戦い方が・・・あなたらしくなかつた

「・・・・・」

「まるで別人のようだった・・。何があつたんだ?」

「僕にも分からぬよ・・。あの時急に激しい頭痛がしたんだ」

「頭痛?」

「その後からのことは・・覚えてない」

「・・・・・」

「・・その後は?」

「蒼いPSを倒した直後に、また新手が現れたんだ」

「新手が?」

「しかも、PS三体だった」

「PSつて・・・」

「PSつて言つても、操縦者はかなりの実力を持つていた」

「・・・・・」

「私も驚いたわ・・。PSでみんなに戦える人つて・・・」

「・・・何とかリュウセイたちがPSを倒したの?」

「いや、俺たちじゃない」

「どうして？」

「突然白いHISが現れたのよ」

「白いHIS？」

「・・・本当なら泡もないといけないんだが、スバルに見せるために残しておいた」

と、リュウセイはポケットから携帯を出して開いた。

「これなんだ。俺たちを助けたのは」

そして画面には白い英雄が写っていた。

「ひー？」の機体つて・・・・・

するとスバルは白い英雄を見て驚いていた。

「知つているのか？」

「ハ、うん」

「どうして知つているの？」

「・・・」のHISを見たのは・・・五年前かな

「五年前？」

「・・・まだその時は軍のまつで保護されていた頃かな」

「そういえば、スバルはしばらくの間軍のまつで保護されていたんだっけな」

「そうなの？」

「うん。両親がいなくなつてから、お母さんの知り合いのキョウウスケさんのところにしばらくの間引き取られていたの・・・」

「・・・そうなんだ」

「そこ」で、僕はキョウウスケさんとアリのことを色々教えてもらつたんだ

「そうなのか？」

「うん。当時はまだ開発途中だから口外無用だつたんだ」

「そうだったのか」

「それで、白いトランクをどうして出したの？」

「・・・五年前・・・その時にキョウウスケさんから初めてアリを扱わしてもらつたの」

「まだ開発途中のアリを・・・結構凄い」としていたのね

「まあね。それでキヨウスケさんと模擬戦を行つていたときに、謎の勢力の襲撃を受けたの」

「襲撃を？」

「うん。無人機数機による襲撃だつた。当時のPSはまだ完全に能力が発揮できなかつたの。だからどんどん追い込まれてしまつて、僕は危ないところまでにいつてしまつた」

「それで、どうなつたの？」

「その直後に、あの白いHISが現れたの」

「・・・・・」

「圧倒的な強さだつた・・・。無人機を一瞬にして撃破して、宙を浮いていた」

（・・確かにあのHISの強さは圧倒的だつた・・）

「しばらくの間、白いHISは僕のことを見て、それからどうかに飛び去つていった」

「そりなんだ・・・」

「・・・全部が終わつた後、やっぱりあの白いHISは立ち去つたの？」

「うん。あの後私たちを少し見て、どこかに飛び去つたの」

「・・・そつか」

「・・・まあとりあえず、スバルが無事でよかつたよ」

「やうね・・・あの白いHのHとも氣になるけど、情報がないんじや調べようがないしね」

「・・・そつだね。わざわざお見舞いに来てくれてありがとうね」

「当たり前でしょ。心配するのは」

「ああ。そうだな」

やうして三人はしづらべ話をした・・・

その頃・・・

「・・・それで、どうだつた?」

「はい。やはり無人機でした。それと内蔵されていたコアは未登録のものでした」

「やうか」

IS学園のある施設にて、山田先生と織斑先生は話していた。

ISの前には機能を停止して半壊していた黒いISが横たわっていた。

「それと、次に襲撃してきた奴の残骸からは何か分かつたか」

「それが、全くの未知の技術で、判明ができませんでした」

「せつか・・・ならいい」

「・・あの・・・織斑先生」

「なんだ」

「そういうえば、蒼いISが撃破されて、次に襲撃してきた集団の際に、織斑先生はどこに行かれたのですか？」

「・・・・・」

PS三体が現れたときに、千冬はどこかに急いでどこかに行ついた。

「・・・・ちよつとな」

「ちよつとつて・・・一体どこに行かれたのですか？」

「・・・・山田先生」

と、千冬はポキオキと指を鳴らした。

山田先生はびくつとする。

「ひつこのは嫌いでな。ちょっとビックに行つていただけだ」

「は、はーーー」

そうして山田先生はびくして作業に戻る。

「・・・・・」

そして千冬は黒いT-Sを見る。

(・・まさか・・・あいつの仕業か・・・だが、蒼いT-Sは・・・やつらの仕業か)

それからじぢぢぢへ千冬は見ていた・・・

更にその頃・・・

「『めんなさいね、アクセル。わざわざアーケゲインの回収をしてくれて』

「たまたま通りかかっただけだ。これがな

と、とある格納庫にアクセルとレモンがいた。

そこではPSの整備や、開発設計が行われているところで、破壊されたアークゲインもそこにあり、なにやら見たことのない機体が多数整備されていた。

「それにしても・・・プロトタイプといつても、アークゲインがまさか撃破されるなんて、思っても見なかつたわ」

「・・・あれで俺の専用機ができるのか?」

「心配ないわ。データは十分に収集できているわ。そこから改善点を出して、あなたが求める機体・・・『ソウルゲイン』の完成に繋がるわ」

「・・・そくなればいいんだがな」

と、アクセルはため息をつくと・・・

「それよりも、単独行動を取るのは控えて欲しいのだがな。アクセル」

すると格納庫に一人の男性が入ってきた。

「・・・ヴィンデル」

そして、ヴィンデルと呼ばれる男性はアクセルとレモンの元に来る。

「ただでさえこちらは人手不足なのだ。ISの奪還準備を整えてい

「今では両親の「ことだ」

「「うちも調べることがあるんだ。これがな」

「調べることだと?」

「ああ。たまたま通りかかったE.S学園で、例の機体を撃した」

「例の機体だと?」

「・・・凶鳥の一つ・・・『赤き凶鳥』だ

「なに?」

「まさか・・・つてじょー?」

「事実だ。」れがな。俺も最初は目を疑つたが、本物だ

「・・・正直のところ・・・凶鳥の開発はもうないはずだけど」

「未だに残つていたのか・・・。しかもあの赤き凶鳥が、か」

「どうする?」だ?恐らくやつらも何かを計画をしてくるはずだ

「・・・やうなれば、こちらも行動を起こさねばな

「わうね。」うちもW-13の機体とW-15の機体の調整を急がせる
わ

「うひも、スコール殿にも見ておこう。なんべく計画を急がせ

「元気な

そうして、ヴィンデルは格納庫を出ると、アクセルは少し後に格納庫を出た・・・・

更に更にその頃・・・・

「・・・ふむ。『レッド』の稼働率は47%か・・・・」

イングラムは『スク』についてヒュッケバインEXのデータを見ていた。

「T・T・T・E・N・Kシステムを何とか使えるまでは成長したようだな・・・・

そしてイングラムは別のデータを開いた。

「・・・じゅうは・・・まだのようだな

それはR・1のデータであった。

「…………」ひらのまうが「――」エクシステムを使いこなしている
よつだな・・。さすがはあの女の息子だ」「

せつして画面を閉じて、イスにもたれかかる。

「…………しかし、まさかあのシステムが発動するとはな。予定で
はもう少し後だつたのだがな」

そしてイングラムはポケットから端末を取り出すと、画面を表示し
た。

「…………まさか、白い英雄が再び現れるとはな」

画面にはあの白い英雄が写っていた。

「…………これはかなり、面白いことになつてこるよつだな」

そしてイングラムは端末をポケットに入れるとき立り、その部
屋を出た・・・・・

Story 9 秘められたもの（後書き）

そういえばこの回を書いていたときに、年を越しましたね・・・。
さて、次回賭けが好きなあの人気が登場します。

所変わつて、田舎のような道を一台のジープが走つていた。

「・・・・・」

運転しているのは一人の男性であつた。

茶髪の髪で、前髪に黄色のメッシュを入れており、二十代ぐらいだ
らひ。

そしてジープはとある軍事施設に入つていくと、運転していた男性
がジープから降りて、大きな建物内に入る。

「あら。意外と早かつたですね・・・キヨウスケ中尉」

そこは格納庫で、様々な兵器が格納され、中にはE-14らしきものも
あつた。

そんなところに、一人の女性がいた。

赤い髪をして、白衣を着ていることから、技術者と見た。

「やることが早く終わつたもので……」

そして男性……キヨウスケは女性に横に来ると、女性の視線の先を見る。

そこには、重装甲で赤い色をした機体が改裝作業を受けていた。

「……まだアルトの改裝は終わりませんか？」

「ええ。根本的に改裝していますから、時間が掛かって当然です」

「……」

「それより、話は聞きましたか？」

「はい。イタリアが開発したISのテストのために、自分が呼ばれましたが……」

「なぜ、あなたが選ばれたかと言つと、理由は分かりますよね」

「……PSとの戦闘データを得るために……ですね」

「その通り……。今回の戦闘は貴重なデータが取れそうですからね。ですから、確実にデータを得るために、初めてPSを用いてISを倒したあなたに依頼したのですわ」

「……そうですか……。しかしアルトはまだ改裝中ですが……」

「ですから、中尉には代用機で戦つてもらいます」

「代用機？」

「いやいや、説明をしながら装着作業に入りますので、よく聞いておくれですね」

そうしてキョウスケと女性は格納庫奥に向かつ・・・・・

「・・・では、『説明します』

「頼みます」

と、キョウスケはエスのアーマーを装着するとは異なり、結構複雑に装甲が装着されていく。

「今回中尉が使用する機体は量産試作機のPS『ゲシュベンストMK-? タイプS』をベースにあなたのPS『アルトアイゼン』の姿を模してカスタマイズした『ゲシュベンストMK-? タイプS A改』です・・。スペック的にはアルトアイゼンより少し劣りますが、それを補うために両腕部にプラズマステークを搭載させ、背面には試作ブースターを搭載させて突進力を向上させました。後、あなたの戦闘スタイルには向きませんでしが一応メガビームライフルをリアアーマーに装着して、左サイドアーマーにはメガプラズマカッターを予備の武器として搭載しておきました」

そして説明が終わったときに、キョウスケは装甲を身に纏っていた。

PSは基本的に『全身装甲』であり、全身に装甲を装着して、赤をメインに白と黒、黄色が施されていた。両肩のアーマーは横に伸びており、両腕には三本ずつ白い棒が搭載されていた。頭の額辺りには、ブレードのような角がついているが、元となつた機体の角を模しただけのダミーであり、カメラアイは緑のツインアイであった。背中には大型のブースターが搭載されており、一対の翼がついていた。

「分かりました…。それだけ聞けば十分です」

「…では、戦果を期待しましよう…。ちなみに相手のデータはありませんので、戦いで性能を見るしかありませんね」

「…・了解」

そしてキョウスケは数歩前に出ると、床にあつたカタパルトに足を置き、台が動き出して、スラスターを噴射させて一気に外に飛び出した…。

「…・あれか」

そして外に飛び出すと、キョウスケは相手の近くに着地する。

相手のISは角ばつたラインが多く、黒に近い紺のカラーをメインにすねと前腕上部に薄い紺色が施され、まるで戦車をイメージするものであった。背中には大型のバックパックを搭載しており、右側には長い筒状のバーツがあり、左側には長い箱状のバーツが搭載さ

れていた。右腕にはガトリング砲のような形状のマシンキャノンを搭載して、左腕にはアーミーナイフを装着していた。頭には顔の上半分を赤い一つのセンサーが搭載されたバイザーで覆われていて、顔は分からぬが、女性だと言うことは分かる。

いや、ISは女性にしか反応しない・・・。特例はあるが・・・

『あなたが・・・私の相手ですね』

と、ISの操縦者から通信が入る。するとISの操縦者は顔の上半分を覆つているバイザーを手で上に上げて素顔を見せた。

十六歳かそのくらいの女子で、太陽の光に反射して輝く金髪は後ろで結んでおり、左目には白い眼帯を付けていた。

「ああ。日本軍所属特殊部隊『ATXチーム』・・・部隊長の南部キヨウスケ中尉だ」

『・・・イタリア軍特殊部隊所属のフィオ・ブレイス大尉です』

キヨウスケの名乗りに、ISの操縦者も名乗った。

『見せてもらいますよ・・・。PSで初めてISを倒したとされる・・・キヨウスケ中尉の実力を・・・』

「・・・こちらも、見せてもらいましょう」

そして両者が身構えると、模擬戦開始のブザーが鳴った。

先に仕掛けたのはフィオのほうだった。フィオナは飛び出すと同時

に右腕のマシンキャノンをキョウスケに向けると弾丸を放つていく。

「つー」

キョウスケはとつたにスラスターを噴射させて横に移動する。

弾丸は正確にタイプSA改に向かってくるが、元になつた機体譲りの突進力で弾丸を避けていく。

「・・射撃は得意ではないが、四の五の言つてられんか！」

そしてキョウスケはリアアーマーにラッティングしてあるメガビームライフルを取り出して、トリガーを引いてエネルギー弾を放つ。

そもそもPSJというのは、ISの技術を用いて、その内いくつかのところはその技術を応用した技術によって作られた所謂『擬似IS』とも言えるものである。そのため、PINC、シールドエネルギー、絶対防御とISの能力は最低限使えるが、武器や機体の量子化ができないので、武器の携行数が極端に少なく、ISの専用機のように機体を待機状態にできない。全体的にPSJの性能はISより少し劣っているが、操縦者の技量次第ではISを凌駕する性能を秘めている。

フィオは放たれたエネルギー弾を回避して、再度マシンキャノンを放つ。

キョウスケはとつたに回避して、メガビームライフルを放つ。

（かなり正確な射撃だ・・・だが、EISにしては機動力が低いな。・。それともこっちの動きを見極めているとでも言つのか・。？）

フィオのHSの機動力は従来のISと比べると若干遅く見える。

「・・・極端なコンセプトで、IISまで戦えるとは・・・。でも

「

と、フィオは左側の箱状のパーツを前に向けてハッチを開いて、ミサイルを発射した。

「ぐつ・・・クレイモアがあれば・・・」

キョウスケはスラスターを一気に噴射した。

「ぐつ・・・」

その瞬間大きなGが目の前から来るが、元の機体と比べれば軽いほうだ。そうしてタイプSA改は突進力でミサイルを回避していく。

「・・・ある程度の動きは・・・確認した」

「なに?」

すると、フィオは地面に着地すると、両脚部後部のパーツを開いて地面に付けると、パーツから無限軌道を出して、そのまま地面を高速で駆けていった。

「なにつ・・?」

しかもそのスピードが宙に浮いているよりも倍近く速かつた。

「お見せしましょう・・・」の『ゼルノグラード』の真の力を

そして筒状のパーツを展開して、砲身を前に向けた。

「通常弾・・装填」

するとバックパックからアームが出てくると弾丸を砲身の基部に装填して、そのまま轟音と共に弾丸が高速で発射された。

「ぐつー！」

キヨウスケはとっさに回避すると、弾丸は後方の丘に直撃して、大きな音と共に爆発した。

（なんて威力だ・・・。ISにあれだけの火力を搭載せるとは・・・。）

そして先ほど弾丸を放った砲身を調べた。

（・・・15センチ砲だと・・・。これだけの大口径の武装を・・・）

「・・・ゼルノグラードの主砲を回避するとは・・・さすがですね・・・・しかし」

すると、さつきと少し形状が違う弾丸を装填すると、キヨウスケに向けて砲撃した。

「ちっ！」

キヨウスケが横に避けた瞬間、弾丸が破裂して無数の弾が弾け飛んだ。

「炸裂弾！？」

無論この攻撃だと云つことだといふことは予想できず、炸裂した弾丸の半分がタイプSMA改に直撃した。

そしてフィオは長距離ライフルを展開すると、キヨウスケに向けて砲撃した。

「くっ！」

キヨウスケはとっさにスラスターを噴射して弾丸を回避していく、メガビームライフルを向けてビーム弾を放つ。

しかしフィオは地上を高速で移動してビーム弾を回避していく、長距離ライフルのトリガーを引いて弾丸を放つていく。

（まさいな・・・。このままだとただシールドを削られるだけだ・・・。ならば・・・！）

そしてキヨウスケはメガビームライフルを捨てると、一気にスラスターを噴射させてフィオに接近する。

「何で無謀な・・・」

そしてフィオは長距離ライフルを向けて弾丸を放つ。

キヨウスケは弾丸を回避しながら、フィオに接近する。

「・・・・」

フィオはキャタピラを後ろに高速回転させて一気に後退すると、長距離ライフルを収納してガトリング砲を展開して、左手でグリップを握つてトリガーを引くと高速でバレルが回転して弾丸が連続で撃ち出された。

「ぐうっ！」

キヨウスケは弾丸の直撃を受けシールドを削られながらも、スラスターを更に噴射して両腕の棒にプラズマを纏わせる。

「プラズマステーキ・・・セット！」

そしてキヨウスケはPSでは成功率が低いが、『瞬間加速』を掛けたフィオの懷に入る。

「つ！」

「ジヒットマグナム！」

そして最初に左腕のステーキを叩きつけ、衝撃を叩き込んだ。

「ぐつ！」

腹部に衝撃が叩き込まれて、表情は見えないがフィオは苦しげの声

を漏らす。

「まだだ！」

そして右のステークを叩きつけようとした瞬間・・・・・

ドガアアアアアアアアアアン・・・・・！

「「つ！？」

すると突然両者の右側に上空からビームが直撃して爆発を起こした

「な、なんだ！？」

キョウスケはとっさに腕を引くと、ビームが落ちてきた空を見る。

すると、上空から黒いI-Sが下りてきた。

（・・・あの機体は・・・）

と、フィオはその黒いI-Sに見覚えがあつた。

そして黒いI-Sはビームが直撃した箇所に着地すると、二人を見る。

「くつ・・・・・フィオ大尉。模擬戦は中止だ」

「・・・了解しました。しかし中尉の機体は・・・」

「俺なら大丈夫だ・・・まだ戦えます」

「・・・・・」

すると、黒いEISは両腕のビーム口を向けてくると、ビームを放つてきた。

キヨウスケとフィオは横に飛んで避けると、フィオは右腕のマシンキヤノンを放つ。

黒いEISは見かけによらず素早い動きで回避すると、再びビームを放つてくる。

「くっ」

フィオは//サイルコンテナを開くと//サイルを放つ。

すると黒いEISは両肩の砲口から拡散したビームを放つ//サイルを撃ち落とした。

「ここだ！」

そしてキヨウスケはスラスターを爆発的に一瞬噴射させて、一気に黒いEISに接近して、左サイドアーマーからメガプラズマカッターを抜き放つと同時に青いエネルギー刃を展開して切り払う。

しかし黒いEISは身体をずらして攻撃を回避した。

「ちいっ！」

キョウスケはその場で回ると勢いよく回し蹴りを黒いEISの横腹に入れた。

しかしその直後に黒いEISは左腕を突き出してタイプSA改を殴りつける。

「ぐうっ！」

そしてキョウスケに向けて右腕をに向けてエネルギーをチャージした。

『 』

すると黒いEISの頭部に弾丸が直撃して爆発した。

それは、長距離ライフルの弾丸で、後方でフィオがライフルを構えていた。

『 』

すると黒いEISは標的をフィオに変えたのか、フィオに向かっていくビームを放ってきた。

「ぐつ・・・

フィオはキャタピラを高速で後ろに回転させて後退しながら長距離ライフルのトリガーを引いて弾丸を放つていく。

しかし黒いEISは弾丸を避けていくと、ビームを放つてきた。

「中々素早い・・・でも

と、フィオはライフルを放ちながら、15センチ砲を展開する。

「徹甲榴弾・・・装填」

そして長距離ライフルの弾丸を数発放つと、15センチ砲から弾丸を放つた。

黒いISは最初の弾丸を回避したが、15センチ砲から放たれた徹甲榴弾が黒いISの胸部に直撃すると、深くめり込み、少しして爆発した。

「つー」

そしてキョウスケが物凄い勢いで黒いISに向かっていき、右腕のプラズマステークを起動させる。

「ジヒットマグナム！」

そして黒いISの懷に入ると、ステークを腹部に叩きつけて、衝撃を叩き込んだ。

「もう一撃！」

と、左のステークも叩き込もうとしたが、黒いISがタイプSA改の左腕を掴んだ。

「くつー！」

そして黒いISはそのままキョウスケを持ち上げた。

キヨウスケは黒いエスに蹴りを入れるが、黒いエスは微動だにしない。

「キヨウスケ中尉！」

と、フィオは15センチ砲を構えて狙いを定めるが・・・

「・・・だめだ・・・」れでは狙いが付けられない

ちゅうビキヨウスケが黒いエスの前に上げられているので、このまま撃てばキヨウスケに当たってしまう。

フィオは移動しようとした瞬間、黒いエスがキヨウスケに右腕を向けてビーム口にエネルギーを充填し始めた。

「まざい！」

と、フィオは近付こうとしたが、黒いエスは右肩を向けてきて拡散ビームを放ってきた。

フィオはとつとつ回避して、後方に下がる。

「・・・？」

するとフィオはあることに気付く。

キヨウスケが「こんな状態でありますながらも、冷静にじつとしていた。

（なぜ抵抗しない・・・。）のままではあなたがやられるのに・・・）

そして黒いI-Sは再度キヨウスケに砲口を向けてチャージを再開する。

「中尉！」

フイオが叫んだ瞬間、遠くからエネルギー弾が飛んできて、黒いI-Sの左腕を撃ち抜いた。

それによつて左腕が爆発して、キヨウスケは開放されるとそのまま左腕のステークを黒いI-Sの胸部に叩きつけて、衝撃を叩き込んだ。

「つー？ 今のは・・・」

すると、遠くの上空で何かが光つて、それからして何かが高速で接近してきた。

「・・・来たか・・・エクセレン」

『はあい。お待たせ、キヨウスケ』

そして白い装甲を持つI-Sを身に纏つた女性が来た。

金髪の髪を後ろで束ねており、水色の瞳をして、二十代ぐらいの女性であった。

身に纏つているI-Sは白を基調に各所の縁に青いラインが施されて

いたカラーリングで、形状はキョウスケが今使っているゲシュベンストMK-?に酷似しており、左腕には三本の棒があり、右手には自身の背丈とほぼ同じの長さを持つライフル『オクスタンランチャー』を持っていた。背中には一対の翼があった。

『それにしても、私が来るつて分かつていたかのよつな口ぶりね

「来るとか言つていただろ」

『あつ、わうだつた・・』

「・・・・・」

『それにしても、アルトちゃんそつくりな機体ね、それ

「代用機だ・・。だがそれはお前も同じ事だろ」

『ええそつわよ・・。ヴァイスちゃんの代わりに用意された第一世代型HS『ゲシュベンストMK-? タイプR』・・あつ、Rは量産試作機のタイプRで、Vはヴァイスちゃんの頭文字ね』

「・・・話をそこまでだ。戦いに集中しろ」

「もつ・・・・。せつかく助けに来たつて言つのに、その態度・・・

と、黒いHSが残った右腕の砲口からビームをエクセレンに向けて放つたが、エクセレンは軽やかに回避した。

「まあ、それがキョウスケらしいんだけどね・・・」

そしてエクセレンはオクスタンランチャーを回すと、下の銃口からエネルギー弾を放つ。

「・・・・」

フィオはエクセレンの動きに驚いていた。

（ふざけた感じだけど、HSの攻撃を全て避けて、的確にエネルギー弾を命中させている・・・。相当な腕前だ）

すると、隣にキョウスケが降り立つた。

『フィオ大尉』

「な、なんでしょうか？」

『今から俺とエクセレンで隙を作りますので、止めを頼みます』

「と、止めを・・？」

『では、頼みます』

と、キョウスケはそのまま黒いHSに向かっていく・・・。

「・・・強引な人だ・・」

フィオは呆れていたが、脚部後部の無限軌道を地面に展開して、足を踏ん張つて、15センチ砲を構える。

黒いEISは両肩の砲口から拡散ビームを放つが、エクセレンはそれも軽々と避けていく。

「わあ・・中々やるじゃない・・。でも

と、Hクセレンはオクスタンランチャーを回して構えると、上と下の銃口から実体弾とエネルギー弾を放ち、黒いEISの両肩の砲口に直撃させた。

「まだまだね

すると、黒いEISは右腕の砲口をHクセレンに向けてきた。

「やひせん!」

と、キヨウスケが瞬間加速を掛け一気に接近して、右のプラズマステークを黒いEISの右腕に叩きつけた。

「ジヒツトマグナム!」

そして衝撃を叩き込まれて、右腕が大きく横にずれた。

「Hクセレン!」

「任せて!」

と、Hクセレンはオクスタンランチャーの実体弾を放ちながら降下

して接近し、キョウスケは更に左のステークを起動させた。

そして黒いＥＳの前にキョウスケが来て腹部にステークを叩きつけ、黒いＥＳの後にエクセレンが来てオクスタンランチャーを背後に突きつけた。

「今だ！」

そしてキョウスケとエクセレンは同時にステークを腹部に叩き込み、ランチャーを背後に撃ち込んだ。

「今です、大尉！」

「・・・ A P S F D ・・・ 装填！」

そして15センチ砲の基部に弾丸を装填すると、轟音と共に弾丸が発射された。

キョウスケとエクセレンはとっさに退けると、音速で弾丸が飛んで行つて、黒いＥＳの胴体を撃ち抜いた。

それによつて黒いＥＳは後ろに吹き飛ばされ、地面に倒れると証拠隠滅のためかそのまま自爆した。

「・・・・・・」

そしてジュウカウと鳴る砲身を上げると、フィオは前を見る・・・・・

そして三人は一旦格納庫に戻っていた。

「・・・今日はこんなことに巻き込んでしまって、申し訳ない」

と、キヨウスケはフィオに頭を下げる。

「いえ、別に中尉が謝ることではありませんので」

「しかし・・・中尉は増援が来ることを分かっていたのですか？」

「相方が前もって、来ると言っていたので」

「やつですか・・・。やついえばその相方は？」

と、キヨウスケは視線を左に向けると、そこにはラドム博士から話を聞かされるエクセレンの姿があった。

「・・・それにしても」

と、キヨウスケはフィオの手足を見る。

ISを装着している時は分からなかつたが、今はISを解除してISSスースツ姿で、右ひざの少し下と左手首の少し上になにやら接続部のようないれが入っていた。

「・・・その手足はどうされたのですか？」

「…………」

「……いえ、聞いてはいけなかつたようですね」

「……そうしてもらえたなら、助かります」

「そつしましょう。それで大尉は今後どーに?」

「私は……IIS学園に入っていますので」

「IIS学園にですか?」

「はい。今日は専用機を受け取りに来て、それから模擬戦に入つた流れです」

「そつでしたか」

するとキョウスケは何か考え出した。

「中尉?」

「大尉が暇でありますら、近衛スバルという男子に会つてくれますか?」

「近衛スバル?」

「ええ。世界でIISを一番目に動かした男子です」

「ああ……確かに一組の、でもどうしてですか?」

「・・・あいつって自分たちATXチームは・・・家族のよつなものです」

「家族・・ですか？」

「あいつは幼い時に両親を無くしました。自分はあいつの母親と知り合いでしたので、その計らいでしばらくの間あいつを預かる」とになりました」

「そう・・ですか」

「ですから、大尉がよろしければ、あいつのことを見て欲しいんです」

「・・・・・」

「・・・・・大尉」

「・・・分かりました。なるべくそうします」

「ありがとうございます」

と、キヨウスケは頭を下げるが、まだラドム博士から話を聞かされているエクセルンの元に向かう・・・

「・・・親がいないのは私だけじゃないのは・・・分かっているけど・・・なんだか」

と、最後にフイオはぼそっと咳き、着替えるために更衣室に向かう。
・・・

そしてその夜・・・・・・

「・・・・・・・・

スバルはベッドにしつ伏せになつて寝ていた。

「・・・・暇だな・・・・

なぜこんな状態かといふと・・・・数分前に山田先生が来てこいつ言った・・・

『部屋割りの整理ができましたので、シユバイツァーさんは移動して下さい』

そうしてゼオラは部屋を移動することになつて、今スバル一人なのだ。

しかしそれではスバルが暇になるだけだった。

なぜなら、今までゼオラが散らかしているものを片付けることがなくなり、もつとも部屋は毎日磨いているので、汚れはほとんどない。・・・

「・・・・はあ・・」

そしてスバルは起き上ると、髪を束ねている紐を解いて、髪を下ろした。

髪を下ろすと意外とスバルの髪は長く、背中の辺りまであった。

「・・・気晴らしにシャワーでも浴びようかな

・
そしてタオルと着替えを取り出して、シャワールームに向かう・・・

Story10 鋼鉄の孤狼（後書き）

アルトアイゼンの登場はもう少し後ですね・・・。でも改装中と言つても、もしかしたらリーゼじやないかも・・・。ちなみにエクセルンが使つていた『タイプRV』ですが、一応言つておきますが黒いほうのRVではありません。

次回では、半額になつた期間限定の弁当をめぐつてスバルとある人物が勝負！？

そして次の日の昼休み・・・

「・・・ああ・・・やつちやつた」

スバルは食堂の前で頭を抱えていた。

食堂にはたくさんの中学生で溢れかえっており、席が空きそうにもなく、待つのも時間が掛かりそう・・・

そもそも何でこうなったかと言つと、四時限目がIISの実習であり、少し時間が過ぎてしまい、着替え終えた時には食堂使用のピークになっていた。

「どうしようかな・・・そのまま待つてると時間が無駄かな・・・

」

そして悩んだ末・・・

「・・・仕方がない・・・ 購買所で弁当を買おつかな

そうしてスバルは食堂を後にし、購買所に向かった。

「…………」

スバルは歩きながら小銭を数える。

「…………もうちょっと小銭を入れておけばよかつた」

小銭は五百何ぼしかなく、弁当を買つのには少し心細い。

そして購買所に着くと、女子生徒が数人いた。

「やつぱり食堂と違つて空いているね…………」

そうしてカウンターに行つて、弁当を見る。

「…………」

そしてスバルはうーんと悩む。

どれも高い…………少なくともボリュームがあるのじゃないと物足りない…………

(といつても、一つ買つほど余裕は…………)

そうして見ていると…………

「・・・あつ」

すると、一つの弁当を見つける。

結構ボリュームがある弁当で、もちろん買えそうにもなかつたが・・・

「ラッキー・・・半額だ」

見れば弁当に半額シールが貼られており、買える値段になつていた。

そして弁当に手を出した・・・が

「つー」

すると後ろから何かを感じたのか、スバルはとつさに振り向くと腕を前に出して誰かの足を受け止めた。

「な、なんだー!？」

そして蹴ってきた人はそのまま後ろに飛んで着地する。

「・・・やるな。私のキックを受け止めるとば」

そしてその人は立ち上がりスバルを見る。

白っぽい髪をしており、背はスバルより少し高いくらい。黒いストッキングを着用して、厚底のブーツを履いていた。リボンの色から

して、一年生だと「いつ」が分かる。

「こきなり攻撃するなんて・・・なんで「こんな」とを」

「お前が私も狙っている弁当を得られないとしていたからだ」

「え・・・？」

スバルは後ろにある弁当を見る。

「「」の弁当のために攻撃を掛けってきたって言つた」

「・・・いや、お前を少し試したのだ」

「僕を・・・試す？」

「お前は私が思つていた以上のものだつたな」

「・・・」

「だが、その弁当は私がもつ」

「・・・あつにく、僕もこの弁当は誰にも譲りたくないんだよね」

「ほつ・・・私は狙つた獲物は逃がさない主義でな・・・」

と、一年生は身構える。

「・・・」

スバルも身構えて臨戦態勢を取る。

「・・・ならば・・・勝負!」

と、一年生は床を蹴ると一気にスバルに飛びかかって足を前に出す。

「へりー!」

スバルははとつそこに腕を前に出して足を受け止める。

そのままスバルは一年生を押し返して、足を思い切って上げたが、一年生は押し返された反動を使って攻撃を回避した。

そして一年生は床に着地すると同時にジャンプして、落ちながらかかと落としをする。

「つー!」

スバルは両腕を上に上げてかかと落としを受け止めたが、強い衝撃のあまり腕が痺れて顔が引きつる。

そしてスバルは両腕を払つて、一年生を押し返して距離を置く。

「・・・な、なんて・・・力なの」

「・・・やるな・・・。あいつが一日おくれのも分かるな

そして一年生はスバルに再度飛びかかる・・・

「・・・はあ、参ったなあ・・・」

と、一夏は髪を搔きながら購買所に向かっていた。

「あのまじや結構時間が掛かってしまうからな」

そう囁きながら歩いていると・・・

「・・・ん?」

すると、購買所の前で何か人だかりができていた。

「なんだ?」

一夏は興味を示して人だかりに近付いてその視線の先を見てみると・・・

「げつ!?・・・スバル!?」

そこには、スバルと一年生が激しいバトルを繰り広げていた・・・

「でやあああつ!-!-」

スバルは回し蹴りを行うが、一年生はジャンプして避けると、そのままかかと落としをする。

「くつ!-!-」

スバルははとつさに横に飛んで避けると、右腕を思い切つて突き出したが、一年生はその拳を受け止めた。

「中々だが・・・まだまだだな」

と、一年生は掴んでいた拳を前に押し出すと、左腕を突き出してきた。

「うー」

スバルはとつさに回避すると、一年生の拳がスバルの横顔をかすれる。

「甘いな」

と、一年生はそのままスバルに足を払つて、スバルはそのまま倒れそうになるものも、両手を付いて前に飛んで一回転し、床に着地する。

「へつ・・・強い・・・どうしたら・・・」

と、目の隅に何かが映つた。

「・・・?」

スバルは田を横にやつてみると、そこにはなぜか一本の木刀があつた。

すると一年生が飛び蹴りをしてきた。

「くつー！」

スバルはとつさにしゃがむと同時に床を蹴つて前に飛ぶと、同時に床にあつた木刀を手に取る。

そして一年生がそのまま後ろに向けて回し蹴りをしてきて、スバルはとつさに木刀を前に出して受け止めた。

「ー」

一年生はスバルが木刀で蹴りを受け止めているところを見て少し驚く。

「ー」

スバルはそのまま木刀を振るい、一年生を弾き飛ばす。

一年生は床に着地すると同時に前に飛ぶと、回し蹴りを行つ。

スバルは木刀を横に向けると足を受け止めたが、一年生はそのまま素早く足を引っ込めると反対の足で蹴つてきた。

「くつー！」

スバルはとつさに木刀を前に出してキックを受け止めた。

「・・なるほどな」

すると一年生はそのまま後ろに飛んだ。

(「Jの男のポテンシャルはJにあるか）

そして一年生はそのままかかと落としを行い、スバルは木刀を上に上げて受け止めた。

・・・が、一年生はそのまま押し込んでいい、スバルは徐々に下に下がっていく。

「くつ・・・・Jのつ！」

そしてスバルは渾身の力で木刀を振るつて、一年生を押し返した。
一年生はそのまま床返りをして床に着地した。

「・・・・・・」

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

そして両者ははじりはじりみ合つたが・・・・

「・・・・Jまでだな」

「・・・・?」

「・・・・今日のところは、諦めるとするか」

そして一年生は立ち去つとした。

「ちよ、ちよっと待つて！」

スバルは一年生を呼び止める。

「・・・近衛」

「は、はい？」

思わずスバルは返事をした。

「・・・まだどこかで勝負の続きをしよう・・・。それまで、力をつけておくのだな」

と、一年生は振り向いてそう告げると、その場を立ち去った・・・。

「・・・」

スバルは数回瞬きをして、木刀を元の位置に戻すと、観戦していた生徒はそのままそろそろと帰っていく。

「・・・それにしても、凄いなスバル」

「あれ？ 一夏に篠ノ之さん」

そしてスバルは半額弁当を買つと、教室に戻るとすると一夏といつの間にか篠がいた。

「その弁当のためにあんな激しいバトルをしていたのか？」

「まあね。これだけは譲りたくないなかつたんだよね」

「・・・意外な面があるんだな・・。それよりそんなにその弁当が食べたかったのか？」

「そりやね・・。この弁当は期間限定のミックス弁当で、本当なら八百六十円するものだけど、半額になつて四百三十円になつたものだよ。こんなに得するものはないよ」

「そうなのか・・・」

一夏はスバルの妙なこだわりに苦笑いする。

「・・・しかしスバル」

するとさつきまで黙つていた筈が口を開く。

「ん?」

「お前・・・相当凄い人と戦つていたのだぞ」

「え? そうなの?」

「・・・全く・・。今人は一年生の『槍水 仙』・・・。この学園では知らない人はほとんどないぞ」

「・・そのほとんどの他つて・・俺たちのことか?」

「そうだ」

「……その槍水先輩って、どのよう凄いの？」

「……さつきの通りに、あの人は相当な強さを持っている。そして何より狙つた獲物は逃がさない・・狼のようだから、別名『狼』と呼ばれている」

「狼・・」

「噂だが、槍水先輩も専用機持ちらしいな」

「そうなのか？」

「あくまで噂だ。何せ田撃情報が極端に少ないようだ。見間違つて言つことがある」

「はあ・・・。まあ専用機持ちならあれだけ強くてもおかしくない・・かな?」

「私に振るな

「……でも、槍水先輩はなんであつさり引き上げたんだろう

「確かに・・」

「・・・・・」

「・・・・・」

「・・・ええと、先に教室に戻つていいかな?」

と、スバルは教室に戻つていく。

「あつ、ちょっと待てって!」

一夏はその後を追い、簞もその後についていく・・・

「・・・・・・・」

そして槍水が廊下の曲がり角を通り過ぎようとした・・・

「・・・どうだつた?私のスバル君は

と、壁にもたれかかって、一人の女子生徒がいた。

水色の髪をして、槍水より少し背が高い人で、リボンの色からして
槍水と同じ一年生と思われる。

「・・・さすがだな。お前が一田置いているだけはあるな・・・。更

「識

「それはそうよ。私の頼もしい執事だもの」

と、その生徒・・更識楯無は扇子を取り出すと、開いた。

「でも、珍しいこともあるのね。あなたが狙った獲物を譲るなんて」

「・・・気まぐれだ」

「せうかしら」

「・・・何が言いたいんだ?」

「ふふふ・・隠したつて、私には隠せないわよ」

「・・・」

「正直なとこひる、じうなの?」

「・・・ねうらぐ、あいつは私より強いのかもしないな。まだ完全ではないがな」

「せう・・・」

「恐りく私が本気を出しても、あいつは私についているだらうな

「・・・」

「・・・いやせうだらうな。なにせお前が鍛えた執事だ。本格的になれば、恐らぐ、な」

「せうわね・・・

「ではな」

そして槍水はそのまま歩いていった・・・・

「・・私の教え・・まだ覚えているよつね・・スバル君」

そうして楯無もその場を去つた・・・・

「うへん・・・おいしい」

と、スバルは教室で弁当を食べていた。

「さすがHS学園・・・購買所でもクオリティーが高いなあ・・・

「確かにそうだよな・・・・」

「うむ」

「それにこんなにボリュームがあつて、全て手作り・・。何よりこのハンバーグの肉質が凄い上にこんなにでかいなんて・・いいねえ。それにこのサバもいい具合にオープンで焼かれているから油のしつこさはないし、ちょうどいい塩分だからおいしい。ご飯もちょうどいい炊き具合だからどんなおかずと一緒に食べてもおいしいこと。何よりこの漬物の味が凄くいい。所謂ふるさとの味ってね」

と、スバルは笑みを浮かべながら食べ進めていく。

「・・なんだか、グルメリポーターみたいだぞ」

תַּחֲנָנָה

・・まあ、別にいいか。人それぞれだし

「そりだな」

うん

そして会話は続いた・・・

その夜

「よし、やめやめてー。」

「ああ！・・また負けた！」

と、リュウセイは自室で星奈と一緒に格闘ゲームをしていた。

「これで五連勝だぜ」

「なまひざ。。・・・」

「はあ・・・喉が渴いたな・・星奈も何か飲むか?」

「うーん・・・じゃあ私も」

そしてリュウセイは冷蔵庫からお茶が入ったペットボトルを一つ取り出すと、片方を星奈に投げ渡した。

「ありがとう・・・あつ、やついえば」

と、ペットボトルのふたを開けながら星奈はリュウセイに言ひ。

「なんだ?」

「三組に専用機持ちができたんだよね」

「え? そうなのか?」

「ええ。入学時はまだ完成していなかつたけど、つい最近できたみたいで少しの間いなかつたけど、本国側から受け取りにいったんでしょうね」

「そりなのか・・・専用機持ちか・・・戦つてみたいな

「リュウセイじゅ ロテンパンにやられるだけよ

「な、何でそり言つて切れるんだよ?」

「だつて、その人現役の軍人よ」

「げつ。やうなのがよ?」

「ええ。だから、戦闘に関してはプロでしうね」

「・・・凄いな

「まあ、頑張つてみれば?」

「・・・・・」

「セレヒ、続きをセリヒよ」

「・・・セリヒだな」

そして一人は再びゲームを始めた・・・・・

「ふわああああ・・・」

その頃スバルは自室のイスに座つて大きなあぐびをする。

「・・・本当に寂しいな・・・」

ルームメイトがいない今、スバルには暇と言葉つかない。

寝る前なのでスバルは紐を解いて髪を下ろしていた。

「・・・寝ようかな」

と、イスから立ち上がりつてベッドに向かおうとした・・・・・

「ノンノン……

「ん?」

するとノックが聞こえて、スバルはドアのまつに歩いてこき、ドアを開けた。

「……どちら様ですか?」

するとドアの前には、一人の生徒の姿があった。

スバルより少し背が高く、首のつなじまで伸ばした金髪を紐で結んでおり、左目には医療で使われる白い眼帯をしており、寝る前なのがタンクトップに短パンとラフな格好であった。しかしその格好が体のスタイルをしつかりと見せていた。

「近衛……スバルさん……ですね?」

「え、ええ。そうですが……?」

「少し話をしてもいいでしょうか?」

「……いいですナビ」

そしてスバルは部屋の中に招きこむよつとするが……

「いいでいいですよ。そんなに長い話をするわけではありませんか

」

「もうですか……。といひで、あなたは?」

「自己紹介が遅れましたね・・・私は一年三組のフィオ・ブレイスと申します」

「フィオ・ブレイス・・・さん」

「フィオでいいですよ。近衛さん」

「は、はあ・・・」

「・・・」

と、フィオはスバルの姿をまじまじと見る。

「・・・な、なにか？」

「あ、いえ・・・。中尉の言つ通りに、女の子みたいですね」

「はあ・・・。よく言われます・・・。その中尉って、誰ですか？」

「・・・南部 キョウスケ中尉です」

「ええっ！？キョウスケさんを知つているんですか！？」

「ええ。つい最近私の専用機のテストの模擬戦相手でした」

「専用機？つてことは・・・」

「・・・軍属であります、イタリア代表候補生です・・・」

「代表候補生ですか……でも、どうして僕のところに？」

「中尉から様子を見て欲しいといわれたので」

「僕のこと？」

「ええ。しかし元気そうですね」

「はい。今度キョウスケさんご会つたら、元気です、と云ふで下さ
い」

「はい。それもよろしくね」

「……あれ？」

するとスバルはあること云ふ付く。

それはフイオの左腕と右足にある線のことである。

「フイオさん……」

「なんでしょうか？」

「……その、右足と左腕にあるこの線って……一体？」

「……」

するとフイオは表情を曇らせる。

「あ……めんなさい……触れてはいけなかつたですか？」

「…い、いいんですよ…。近衛さんは知らなかつたのですから…」

•
•
•
•

「・・・左手首の少し上から、右足の膝の少し下は・・・義手と義足です」

「え・・・? 義手に義足?」

い
い
・・・幼い時に、交通事故にあって、両親と共に左腕と右足を失

と、
フイオは左目の眼帯を指す。

「・・左目も失いました」

—

「・・・これで、分かつていただけましたか?」

「は、はこ・・・それにしても、よくできっこますね・・・」

「はい・・・。かなり精巧に作られた義手と義足です。一目見ただけでは分かりません」

「そ、うなんですか」

「・・・それでは、私はこれで」

「あ、はい。ま、また明日」

「ええ。また明日」

そしてフィオは自室に戻つていった・・・

「・・・本当に・・・いろんな人がいるんだね・・・」

そしてスバルはドアを閉じると、そのままベッドに向かつて行くと飛び込み、そのまま眠りに付いた・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7277y/>

IS - インフィニット・ストラatos - 希望と絶望の力

2012年1月8日18時51分発行